

て、如何にすれば教育勅語が効果を收むるかを問へり。吾人以爲へらく、それは唯史傳教育を盛にするの外なき也。元來、我國は儒教や佛教の入らざる前に、我國特有の教育法ありき。即ち今の語にて云へば、史傳教育也。一家團欒して、祖先以來の事蹟を語りつぎ、言ひつぐうちに、自から人の取るべき道がわかり、よく孝に、よく忠に、よく義に、よく勇に、所謂大和魂は養成せられし也。今日民間に講談の行はるるも其遺風にして、日清戦争に勝ちしも、日露戦争に勝ちしも、講談の功多きに居るとさへ稱せらる。今の中等以下の教育にも、全く歴史なきにあらず。されど時勢の變遷を説くに急にして、細かく個人の嘉言善行を傳へず。歴史の骨ありて、歴史の肉なし。かくて、活きたる器械を作るを得べし。血あり涙ある人間を作らむは、抑々難い哉。

知識は方便也

人生書を読むは憂患の始め、と蘇東坡の言ひし如く、知識は却つて

不幸を來たすことありとも、必ずしも主觀的に幸福を増すものに非ず。知識は方便也、目的に非ず。憐むべし、世の昧者之を悟らず。自から學者と稱するも、實は學問の貯藏庫なるもあり。自から哲學者と稱するも、實は哲學史の蓄音機なるもあり。自から歴史家と稱するも、實は史料の運搬車なるもあり。此の如きは、物也、道具也、人に非ず。文明の世、汽車なかるべからず、電話なかるべからず。斯る生きたる器械も、亦必要也。吾人は一種の器械として、之を便とするのみ。人としては、何等の價值をも認めず。

意見

人に意見せらるれば、腹が立ちて、その人の缺點を、さがし出し、あなたも、こんな缺點があるに、よく意見が出来ますねと、直に喧嘩腰になるは、青年の常弊也。また女子小人の常弊也。その人の爲を思へばこそ意見すれ。意見する人に缺點があらうが、あるまいが、全く



關係なき別問題也。意見がよければ、従ひ、よからずんば、従はざるまでの事也。好意を思はずして、むかッ腹を立つるは、餘り胸がせますぎる也。親が放蕩するくせにと思ふは、それ以上の愚物也。

所謂神童なる者

少時の鋭は、必ずしも、あてにならず。『十歳で神童、二十歳で才子、三十過ぐれば唯の人』とは、よくこの間の消息を説明したるもの也。少時悟りが早く、記憶がよく、摹擬が巧にして、眼前の事を、早呑込すれば、それが所謂神童なるもの也。神童ならずとも、伶俐にして、神童的なるもの也。その悟りが早しとは、唯受動的に頭をはたらかせれば出来ることにて、深思熟慮を要せず。かかる頭脳にては、皮相の事は、常人より悟りが早けれども、事物の内にはひそめる眞理にいたりては、深思熟慮するにあらざれば、悟られるものに非ざる也。

社會游泳法

吾人の生活せる社會も、一種の水中也。社會に生を保たむには、社會に游泳するの法を講ぜざるべからず。世に官海游泳法といふことあり。こは、智能なく、識見なく、操守もなく、唯巧に權に媚び、勢に附するをいふ。一般の社會游泳法は、そのやうに卑劣なるを要せず。先づ身體の強壯を圖らざるべからず。身體強壯ならざれば、到底社會の奮闘に堪へざるべし。されど身體が強壯なるのみならば、下等の勞働に役立つのみ也。藝能なかるべからず。字が上手とか、畫が上手とか、學問があるとか、文章が達者とか云ふは、皆な藝能也。大工、左官、裁縫なども藝能也。されど、藝能は、智を待つて、始めて大に用を爲す。藝能と合せて、智の發達を圖らざるべからず。教育勅語に、『智能を啓發し』とあるは、即ちこれ也。されど、如何に智能ありとも、その智能を用ゐずんば、智能はあれども、無きが如し。更に、人は勤勉ならざるべからず。



## 智と勇

浮世は、萬古休まざる戦闘の巷也。人は、浮世の戦闘に堪ふるだけの武器を備へざるべからず。武器とは何ぞや。智と勇と也。今の學問に耽る青年は、やゝもすれば、この武器を缺く。故に高遠なる理想あるも、之を行ふの勇氣なく、社會に對する同情あるも、之を施すの方法を知らず。かくて、しやうことなしに孤立し、山にのがれむとし、進んては死にのがれむとす。これ卑怯臆病の致す所也。斷じて男子の事に非ず。

## 學校騒動、賄征伐

學校騒動を起すにも、それ〴〵相當の理由あるべし。されど、少年の士、深く事實の真相を解せず、或は小さき不平に驅られ、或は校長を誤解し、或は野心ある教員におだてらるゝなど、血氣にまかせて、無謀なる舉に出づるが、多くの學校騒動の原因也。年とりて智恵つき

て考へて見れば、其非を知るべきも、その時は、尤も千萬とのみ思ひ込み、青年の活氣押へ難く、學問も、將來の成功も、すべて棒にふるに至る。われ其活氣を愛す。されど、青年の活氣をもらすべき所は多し。賄征伐にもらし、學校騒動にもらすが如きは、これ活氣の洩らし方を誤れるもの也。

## 趣味さまざま

下戸は酒中の趣を知らず。上戸は牡丹餅の味を知らず。人は氣質の雑多なるにつけて、趣味とする所も亦さまざま也。夏は涼を思ひ、冬は暖を希ひ、餓ゑては食を選ばざるも、満腹の後は西洋料理も鼻についたなど贅をいふ。人は境遇によりて趣味とする所も亦さまざま也。

## 社會の怒濤中に猛進せよ

水に泳ぐの法を知りて、然るのちに、水中に入れ。社會に泳ぐの法を知りて、然るのちに、社會に立て。水中にては、各人、自から泳ぐ



に急也。これに同情を求むるは、求むる者が無理也。溺者を救ふの人ありとも、こは、はじめより豫期すべきにあらざる也。社會にても、各人、自から生活するに急也。これに同情を求むるは、求むる者が無理也。境遇事情の如何によりて、社會の溺死を救ふの志士仁人ありとも、こは、はじめより豫期すべきにあらざる也。水に泳ぐの法を覺ゆるには、僅々一箇月以内の日子にて足る。社會に泳ぐの法を覺ゆるには、そのやうに容易なる者に非ず。少年時代、青年時代を之に充てざるべからず。智の上には上あり。能の奥には奥あり。一寸ぐらゐの智能ありとも、油断すれば、世の進歩におくられて、溺者たるを免れざるべし。男子生れて地に墮つ、無爲には居られず。汝の筋骨を鍛へ。汝の精神を鞏固にせよ。深く己れに恃む所あるまでに、自から勉めて、然る後に、社會の怒濤の中に猛進せよ。鮒や金魚では、大海には泳げず。大海に泳がむには、百川を破るの長鯨と爲れ。鮒や金魚の癖に、

妄りに長鯨の志を懐かむには、嗚呼、危い哉。

#### 厭世の感

厭世の感は、青年に起りやすきもの也。否、少し思索する者は、必ず起すべきもの也。とかく、青年は、何でも買ひかぶる癖あり。日本一の高山と聞きて、富士はどんなに高きかと思つて、登つて見れば、思つた程には高からず。英雄豪傑と聞いて、どんなにえらいかと、逢つて見れば、思つた程にはえらからず。萬事この具合にて、豫想と異なりて、失望することのみなるを以て、従つて、厭世の感が起らざるを得ざる也。つまり青年に免がれ難きくせとして、買ひかぶるより起ること也。はじめより、世の中は下らぬものと思へば、何も失望することは無き也。

#### 人生は一種の競走場也

人生は、一種の競走場也。才氣のすぐれたる者は、身體のこなしの



矯捷なるものにて、一時は或は勝を制することあれども、終には、長き歲月にかけて、こん氣ありて、よく刻苦する者に負くるべし。  
あせらず、いそがず、熱しすぎず、一時の虚榮を求めず、倦まず、たゆまず、常に悠々として、均一の歩調を取りて進む者は、體ぜんたいの強きものにて、終によく大成し、大勝す。

芋を洗ふが如し

里芋や薩摩芋をあらひみかくには、桶の中へ、水と共に入れて、棒にて、かきまはす。かくすれば、芋は、桶のがはと棒とに當りて、みがかかるゝのみならず、芋同士、すれ合ひて、自からみがかかるゝ也。  
之と同じく、人が心をみかくにも、父兄の教化、先生の教化、社會の教化などの外、朋友同士が、相互に勵ましあひ、制裁しあふことが大切にして、且つ効力あるもの也。

金は手段也

清貧を以て安んずる余輩とても、あながち、家の富むを嫌ふにあらず、國の富を願はざるにあらず。然れども、金は目的にあらずして、手段也。もしくは副産物也。もしくは希望の殻也。金にて枉ぐべからざる者ある處に、人間の人格を見る也。

趣味を得よ

浮世を面白くおくらむと欲せば、浮世に趣味を得ざるべからず。趣味のある處、人生あり。趣味の無き處、人生無し。牛羊は、草を喰ふことに趣味を有す。故に牧場は牛羊の天地也。牛羊にして、草を喰ふことに趣味を有せずんば、牧場に生存すること能はざる也。人は動物と異なりて、趣味とすべきもの多し。戀愛もあれば、名譽もあり。藝術もあれば、金錢もあり。學問あり、宗教あり、あらゆる事業あり。何か一つ趣味を感じさへすれば、人の世にあること、なほ草食に趣味を有する牛羊が、牧場にありて嬉々たるが如くなるべし。牛羊が生意



氣に、草をくつてばかり居たつて下らぬと思へば、その牛羊にとりてまことに牧場は下らぬもの也。下るも、下らぬも、心ひとつ也。趣味がふかければ、ふかき程浮世が面白く、趣味あさければ、浅き程面白さがうすく、全く趣味なければ、浮世は地獄にひとしかるべし。

#### 不名譽の廣告

廉耻心あるものにして、はじめて、眞の名譽心あるもの也。俗人はたゞ、目前の名譽をほしがり、名譽を得むとて不正なる手段を取り、下らぬ見えばうをなし、自慢をなし、もしくは、不平を起し、怨聲をもらして、却つて、名譽を失ふことを知らざる也。余は、人に接する毎に、幾んど了解に苦むは、わが名譽を得むとて、傍いたき吹聴をしたり、見えばうをするもの、心也。本人は、それでいゝ氣なるも、識者に對しては、自から不名譽を廣告する也。

#### 記憶力の養成

學校にある間は、理解力を養はざるべからず、また獨創力を啓發せざるべからざれども、試験の關門を過ぐるに、記憶力が最も必要也。人によりて、記憶力の多少あり。記憶力の乏しきものは、學校にある間は、大に損也。

記憶力は、年齢の多少によりて、増減す。少年の時は、記憶力つよけれども、年老ゆるに従ひて減少するが常也。これ生理上の關係もあるべし。又事業の繁簡は、大に記憶に關係す。少年の時は、色々氣をくばる必要なく、日永きこと年の如くなれども、年長じて、關係多くなるに従ひ、あちらにも、こちらにも、氣を配ばらざるを得ざるやうになり、心おちつかずして、記憶の印象うすくなるものなり。又暴飲暴食して、胃を悪くし、従つて腦を悪くし、従つて記憶力を減ずることあるべし。余の過去に見るに、少年時代は、漸く人並だけの記憶力ありしが、暴飲暴食の結果なるべし、二十二三歳の頃より記憶力人並



より遙に下れり。爲めに學校にて試験をうくる上にも、自から學を修むる上にも、文をつくる上にも、損害をうくること甚し。少年の士、願くは前車の覆へるにかんがみよ。

毀譽の外に卓立すべし

褒むれば、提燈持となし、媚ぶる者となし、求むる所ありとなし、悪く言へば、悪意あるものとなし、恨をはらす者となし、亡き友を忍びて、筆に、口に、事業に、之につくせば、友をかつぐとけなす。世俗は、卑俗なる己れの心を以て、すべて他を推す。世俗の毀譽の外に卓立せざるべからずと、古人がくれづも戒めたるは、この事也。

圭角

何人も、少年の時は、圭角あるが常也。この時代には、圭角ある方が、却つてよき事もあれど、世に處するに至りては、圭角のみにては衝突多くして、到底事業をなすべくもあらず。是に於て、雅量の必要

を生ず。

現實我と理想我

賢を希ふは、これ人が賢に進むの基礎也。佛教に所謂、縁ある衆生なり。その念が信仰となりて、はじめて、理想に猛進する也。利害得喪に迷はざる也。毀譽褒貶にかゝはらざる也。艱難に屈せざる也。生死以上に超脱する也。既にこの信仰ありて、然る後に、修養あり。修養ありて、然る後に、眞の發達ある也。信仰と修養とは、一寸考ふれば相密接するやうなれど、實際にありては甚しく懸隔す。之を密接せしめむには、現實の我の外に、理想の我なからざるべからず。かく現實の我と理想の我と並立するは、これ人格の高大を致す所以の基礎也。

力

宇宙は力也。宇宙の一部たる人生も亦力也。力ある處、宇宙あり、人生あり。力なき處、即ち死滅也。宇宙もなく、人生もなし。人は、



生れながらにして、力を有す。その力を揮ふ處、即ち人生の意義也。

日本人は家を成すに急也

一體に日本人は家を成すに急也。學校を出るより早く、金にありつきたく、金にありつくより早く、否、ありつかずとも、妻をもちたく家を成したく、出来れば満足し、出来ざれば、寂しく苦しく煩悶す。出来て、満足するも、よけれど、妻あれば子あるは、天地自然の理。一人出来る、下女がいる。二人出来る、乳母がいる。家族多くなる。費用多くなる。物價騰貴する。その割りに月給は上らず。主義も妻子の爲めに引つ込ませる。研究も生活の爲めに妨げられる。何かコンミツションでも無くては、やり切れぬ。終には賄賂までも取るやうになる也。男子、四十にして家を成す、まだおそしとせず。早く家を成さば、後日、大に煩悶することあるべし。

坦々たる大道

路は、坦々たる大道こそ、歩きよけれ。然るに、村學究の徒、かくては平凡なりとて、ことさらに山によりて棧道をつくり、人をして歩行になやましめて、以て自から喜ぶ。愚ならずや。路は、歩き易き爲につくる也。ことさらに、歩き難からしめて、路の用、何くにある。學は、人を導く無形の道也。さるに、わざと之を崎嶇にして人を誤り世を害して、學の用、何くにかある。

貧にして義理はる人

世に感心なるは、貧にして、義理はる人也。金ありて義理はること、誰でも出来る事也。否、はきだめと金とは、きたなからざれば、溜まらずとて、却つて義理を缺いて顧みざるもの多し。貧なるも、金あるときは、義理ばり易けれども、憤鼻揮までも質において義理ばらむとする心をくめば、涙なきを得ず。然るに世人は、たゞ金錢物品の多少をうけて、その志をうけず。心なきわざ哉。



孝は百行の基

古人云へり、忠臣は孝子の門より出づと。忠孝の心のもとづく處はもと一つ也。一片の誠心、之を親につくして孝となり、之を君につくして忠となる。なほ、愛國となり、仁侠となり、博愛となるなど、涙あるの行爲は、孝を身解するものにして、はじめて、之を身解すべき也。心に誠なきもの、もしくは、残忍酷薄なるものは、常に孝を解せざるのみならず、到底、大事業をなす能はざるべし。げに、孝は、百行の基なる哉。

骨惜み

骨を惜むもの、中には、天性懶惰なるもあるべけれど、人の見ぬ處にて、眞面目に働くは、損也、こればかりの報酬に對して、餘計に働くは、損なりとて、勘定づくにて、精を出さぬも多かるべし。不心得も、亦甚しきかな。人は見ずとも、神は見る也。神は見ずとも、己れ

の良心は、之を見る也。殊に、人が見ずと思ふは、あさはかなる考にて、人は口に出してこそ言はざれ、知らざるべしと思ふことを、案外知り居るもの也。おもてに働くよりも、かげに働く方が、却つて人の信用を博するもの也。

勉強の趣味

勉強せずして、藝能が出来るならば、天下これほど仕合せな事は無けれど、さうは甘くは行かず。如何なる天才でも、刻苦せざれば發達せず。況んや、凡庸の人をや。趣味を解せざるが故に、不勉強なるべけれど、勉強せざるが故に、趣味は、いつまでもわからざる也。否、懶惰の趣味を解せる也。活動の世の中に、懶惰の趣味では通らず。半年必死になりて勉強して見よ。半年でゆかずば、一年やりて見よ。一年でゆかずば、二年やりて見よ。必ずや、勉強の趣味を解すべし。

金を費すは金を得るの道



酒をのむに、金入り、煙草をのむにも、金入る。かゝる贅澤品を用ゐることを廢すれば、金残らむ。骨董道樂、書畫道樂、盆栽道樂などにも金入る。かゝる道樂をやむれば、金残らむ。交際ひろければ、何やかやと費用多し。成るべく交際せぬやうにすれば、金残らむ。などと考ふるは、一應は尤もなる事也。何人もこの考は無かるべからず。然れども、こは消極的方面也。一方には積極的方面を考へざるべからず。成るほど交際すれば、費用多く、道樂すれば、費用多く、酒、煙草を用ゐれば、費用多し。されど、一考するを要す。植物には、肥料なかるべからず。肥料に金を費すは損なりとて、肥料を與へざれば、植物は枯萎すべく、結局、大に損也。人が衣食住以外の事に、金を費すは、一寸、損のやうなれど、それが其人の慰みにもなり、氣やすめにもなり、保養にもなり、興奮劑にもなりて、其人に必要なること、なほ肥料の植物に於けるが如し。よしや、それほど迄に必要ならずとも、出さざるを得ざる金ありと自覺すれば、随つて氣が張り、奮勵して、自から多く金を得るもの也。

平凡必ずしも平凡に非ず

世に平凡なるほど、下らぬことはなけれど、少數のなま物識りの平凡とする處、必ずしも眞の平凡に非ず。植木の中にも、たゞ直立すれば、目だゞず。曲りくねりたるものが、人の注目を惹き、その愛顧をひく。世の文筆を職とし、言論に従事するもの、斬然頭角をあらはさむとて、實行の如何を顧みず、世に害あると否とを顧みず、強ひて人の注目をひかむとし、ことさらに異を樹て、こけおどしをするもの少なからざれども、ひとり識者の笑を如何せむ。

信ずれば鰯の頭にて可也

今の世、學問を過重するの弊あり。一部の青年は、哲學を過重す。されど、學問は、唯、理を知る也。人格の修養にはならず。哲學は、



科學の侵入し來らざる古壘殘壁に據りて、知らむとする也。その知る所は、哲學者によりて、まち／＼也。科學の如き正確なる眞理あるに非ず。ひと通り哲學史を讀みて、思想の修養に供するは、必要なる事なれども、哲學を以て、人生の歸趣を知らむとせば、恐らくは、失望せむ。すべて、知るだけにては、立命は得られざる也。忠孝の教を聞き知りたればとて、孝子や忠臣になれるものにあらざるが如し。今の一部の青年、一にも哲學、二にも哲學、哲學によりて、人生問題の上に、確信を得むとすれども、唯知るにとゞまりて、煩悶は依然として煩悶也。

まことに安心立命を得むとせば、知るのみにては不可也。信ぜざるべからず。儒教でもよく、武士道でもよく、佛教でもよく、耶穌教でもよく、下つて天理教でもよし。更に下りて、鰯の頭も信心、鰯の頭にもよし。信じさへすれば、そこに神あり、極樂あり、未來あり、

人生の歸趣あり、安心立命ある也。唯智慧の高下によりて、信ずるものに高下あるだけの事也。

#### 戦闘ある處人生あり

人生とは、戦闘の謂也。戦闘のある處、人生あり。戦闘のなき處、人生なし。戦闘する能はざるものは、一日も世に存在する能はず。

#### 一生の計は少年に在り

古人曰く「一日の計は早朝に在り、一年の計は正月に在り、一生の計は少年に在り」と。語を寄す少年の士、卿等は毎に新年に臨みて、一年の計をなすと共に、一生の計をなさるべからず。豈に徒に嬉々として難煮餅を食ふのみにして止むべけんや。

少年の士よ、徒に文學に淫して、自から小説の主人公となり、涙もろき男となり、戀愛とやらに憂身をやつして國家百年の理想を擲ち、星や堇のあはれを知りて、社會、國家、人道の前に骨なく、腸なき似而



非詩人となる莫んば可也。

此世は客也

『此世は客に來たりたるなれば、義理あるべし。心に適ひたる食事に向ひては、善き馳走に逢ふと思ひ、心に適はぬとても、客なれば譽めて食はねばならず。夏の暑さにも客なればたしなまねばならず。冬の寒さにも、客なれば堪へねばならず。腹立つことも客なれば莞爾とせねばならず。ちひさき家なれども客なればぶしやうして居らねばならず。衣類きたなしとても客なれば堪忍せねばならず。親子兄弟召つかふ小者に至るまでも、客なれば挨拶よくし跡に心を残さず御暇申すがよし。父母に呼ばれてかりに客に來て

心残さず歸るふるさと

水戸義公』

かく人生を觀ずれば、腹もたつとなく、悲しきとなく、不幸なる事

もなく、愚痴もなく、個人同士よく調和して、各自に安心立命を得らるべし。

草木と共に化せむ哉

人に智あるは、幸乎、不幸乎。草や、木や、毫も感覺なし。春至りて榮え、秋來りて萎む。其間に苦痛を知らず、煩悶を知らず。願くはわれ草木と共に化せむ哉。

人は何故に生れたるか

人はたゞ五尺の體を以て、地球の上に動いて居るものゝみ。何故に生れたるといふ深き理由あるべき筈なく、何をなさねばならぬといふわけもなし。飢ゑて食ひ、渴して飲み、疲れて眠り、壽命つきて死ぬるまで也。人が如何にして作られたるか、世界は如何にして成りしかは、到底わかるべき筈なし。人に智あり、智の満足を得んために、此等を解釋せむとするは、一種の道樂として可也。要するにたゞ一種の道樂



也。酒ずきなる人は、酒を道樂とせよ。骨董好きの人は、骨董を道樂とせよ。されど、もし本氣になり、世界人生の創造を解釋せむとする者あらば、馬鹿の骨頂なるべし。

世の中

人生に就いて、何も考ふる所なくして可なる乎。人に思考力ある以上は、全く考へずといふわけには行かざれども、なにがしよりは食ふ菓子、詩を作るよりは田を作れ、かゝる益もなき空想に精力を費やさむよりも、もう少しお互の爲めになると考ふるが、氣の利きたるものなるべし。狂歌師歌うて曰く、

世の中は何のへちまと思へども

ぶらりとしてはくらされもせず

まづ世の中をこのくらゐに考へ居るがよかるべし。

自然に従ふのみ

自然は、人類をして、生存競争をなさしむ。われ逆らはず、競争せむのみ。競争の結果は、人類をして、智力をまさしむ。われ逆らはず、智をみが、むのみ。自然は、我に慾を付す、われ慾を満さむのみ。自然は、われに活動力を付す、われ起つて活動せむのみ。活動や慾や競争や、何の意味なるかは、問ふを要せざる也。

閑居してろくな事なし

小人閑居して不善を爲す。小人ならずとも、閑居して、ろくな事なし。終日労働するものに、邪念のきざすべくもあらず。而してその労働後の睡眠は如何に甘くして、穩なるべきぞや。閑居するものは、労働の味を知らず、従つて睡眠の味を知らず。覺めて苦痛を感じ、夢にも煩悶す。即ち其生や苦しく、其死や更に苦し。睡眠の苦しきが如く、死も亦苦しき也。

妄りに非望を抱くべからず



人の慾はあくまでも大なるべし、氣はあくまで、壯なるべし、膽はあくまでも大なるべし。されど、大にしては、人間の分あり、小にして個人の分あり。妄りに非望をいだくべからず。

好む所に適従す

世の中は、廣きやうにて狭く、狭きやうにて廣し。政治や、軍事や、商業や、工業や、學問や、文學や、技術や、人の活動すべき處は、到る處にあり。その中にて、何か好む所、適する所あれば、百年の一生を之に用ゐるも、なほ短さを感じず。死ぬるまでも、常に希望ありて、浮世が面白く送らるゝ也。

好む所に従へば心常に愉快也

人、好んで適する事に身を委ねれば、其心常に愉快也。心愉快なれば、身體も健全也。邪念さざずして、安心立命も自から其中に得らる。よそ目には、あのやうに骨折りては身體がつかさるべしと見ゆ

るも、本人は、さばかり苦しまず。慾望大にして、希望益大に、希望大にして、快樂愈大也。人生の要、實に此に歸す。

人生の味

世俗の毀譽褒貶以外に卓立して、わが適とする所に従へば、寧ろ即ち我也。我即ち宇宙也。心常に融々として、たゞ人生の面白さを見て、苦しきを見ず。かくて、はじめて、人生の味をさとるを得る也。

灌木となりて花をつくるも面白し

靜思せよ、植物は必ずしも松杉の如き大木が價あるものと限らず。灌木となりて花をつくるも、亦面白からずや。更に少さくなりて、菊となり、蘭となりて、香を放つも亦面白からずや。

思ひきりのよき事

思ひきりのよきといふ事は、消極的なれど、場合によりては、安心立命を得る唯一の方法也。例へば天野屋利兵衛が、赤穂侯の寶物を盜



みもせぬに、盗みたりと疑はれて、一言も愚痴をこぼさず、悠然として死に就かむとしたりしが如き、即ち是也。この覺悟あらば、病氣にもせよ、逆境にもせよ、人間到る處に、安心立命を得らるべし。

### 良心の呵責

余は信ず、世に良心の呵責ほど苦しきこと無しと。而して普通の人  
にありては、責任を果さるること、これ最も強く良心に呵責せらる、  
條件也。

### 人は唯一生活動すべし

人は唯活動力あるまゝに、一生活動すべし。これ即ち人生の意義也。  
必ずしも何故にと問ふを要せず、強ひて問ふならば、唯活動力あるが  
故にと答ふれば、即ち足れり。試に思へ、睡眠休息は、心身に快なる  
が如くなれども、活動したる後なるが故に、然るのみ。朝より晩まで、  
今日も、明日も、一年中一室内にのみ寝ころんで居れと言はれて見よ。

始めの二三日の中は、或は快きかは知らねど、到底之に堪へ得べきもの  
のに非ず、これ人間自然の状態也。もとより活動の間には、小休息、  
小睡眠を要すれども、活動ほど人に取りて楽しきものはなし。人は到  
底活動せざるを得ざるやうに、地球の上に生れ落ちたる者也。

### 如何にして情慾を抑ふべきか

如何にして情慾を抑ふべき乎。佳肴食ひたく、美酒飲みたく、其他  
諸種の情慾常に胸中に動く。人に情慾あるは、活動ある所以也。情慾  
大なるものは活動大に、小なる者は之に反す。然らば情慾はそのまゝ、  
増長せしむべきもの乎、曰く、否、毒で毒を消すが如く、情慾で情慾  
を抑ふべき也。論語に、賢を賢として色に代へよとあるは、即ち此意  
也、賢を希ふ精神上の情慾を以て、賤しき色慾を抑ふる也。

### 日本人は胃病的民族

日本人は胃病の民也。故に神経質也、瑣細なる事にも激し易き也、



怒り易き也、不平を起し易き也、ふさぎ勝ちなるが常也、意志弱き也、堅忍不拔持久なる能はざる也、倦み易き也、事業に熱心ならざる也、懶さ也、活潑々地ならざる也、常に眠を思ふ也。之を胃病の特質とす。而してこれらの特質は、大國民たる資格なきもの也。

禍は口より出て、病は口より入る、胃病は萬病の本也。

安心立命の境地

世に事を爲さむとする者は、進取の氣象盛なると共に、また安心立命の境地なかるべからず。安心立命とは逆境に屈せざるの謂也、愚痴をこぼさざるの謂也。運命の非なるに泣かざるの謂也。光風霽月、達して喜ばず、窮して悲しまず、得喪休戚の間に悠々として、天を樂しむは、豈に大丈夫の襟度にあらずや。

社會の事は卑近也

學殖増し、理想高くなりたる者の眼より見れば、社會の事はすべて

卑近にして、兒戯の如く感ぜらるべし。されど、如何に大思想、大力量を有する人も、社會の多數を相手とする仕事は、自から高尚なる能はず。少年の空想より一轉して、社會の現實に接せば、恐らくはその卑近、淺薄、乾燥、無趣味なるに堪へざらむ。かく卑近なれども、複雑也、單純ならず、學理一方に推し得べくもあらず。才幹ある上にも、經驗と熟練とを要する也。

逆境あるを忘るべからず

社會に活動せむとする有爲の年少諸子。少し空想の鋒銛を收めて、複雑なる社會を、こまかに、且つ靜に觀察せよ。順境のみを見て、逆境あるを忘るべからず。逆境に立ちたる時に、運命と戦ふに足るべき勇氣を養はざるべからず。

彼處は此處とならず

彼處は此處とならずとは、シルレルの警句也。理想と現實と相一致



せざることを、なほ彼處と此處と一にならざるが如き乎。而かも之を近づけむとするものは人也。普通の人には、肉慾の奴隸となりて、五十年を醉生夢死すれども、稍事を解する者は、之が爲めに焦慮し、煩悶し、困死す。

誠實

中庸に曰く『誠は天の道也、之を誠にするは人の道也』と。世に處するの道は他なし、唯誠實の一語あるのみ。誠實とは、何事をなすにも我誠心をつくすの謂也。即ち詐はらざる也、欺かざる也、面従後背せざる也、偽善者偽君子ならざる也、不義の富貴を屑しとせざる也。我正理正道と信ずることは、一身を擲つも辭せざる也。我非理非道と信ずることは、如何なる苦痛に逢ふも屈せざる也。權謀術數は必ずしも惡ならず、唯其心術の如何によるのみ、私利私慾より發する權謀は、大罪惡なれども、其正しき目的の爲めに、止むを得ず權謀を用ゐるは、

敢て咎むべきに非ず。馬鹿正直を以て誠實を得たる者とすべからざる也。

處世の道

處世の道は、獨立自營に始まり、我道を世に行ふに終はる。學殖の深淺、見識の高下によりて、道とする所に大小あり。學問につくし、藝術につくし、國につくし、人道につくすなど、一にして足らざれど、己のみならず、他の爲めにも盡すことは、一也。獨立自營のみに終はる人は、これ醉生夢死の徒也。走屍行肉也。而して道とする所は多けれども、之を主觀的に見れば、心の満足に外ならず。満足の大小は、やがて人物の大小をあらはす者也。

馬鹿を見るの覺悟

餘りに正直なれば、馬鹿を見ること多かるべし。馬鹿を見て始めて人を恨み、世を罵るは愚也。始めより馬鹿を見ると自覺しながら、心



を正しくし、行を直くし、馬鹿を見ても、恨みず、悔いず、飽くまで我道を貫き、俗人の毀譽褒貶以外に卓立して、自から心に満足す。これ大に賢なる者也。又之を大愚と云ふも可也。少し賢なるものは此域に達すること能はず。

#### 健全なる常識の發達

世に處する手段には健全なる常識の發達を要す、學者は學問に拘泥し、専門の知識深くして、反て常識を缺く。古來學者の取りたる天下なき所以也。人生の事は、悉く健全なる常識にて判斷するを得べし。而して健全なる常識を得むには學問を要するは言を待たざれども、學問の奴隸となりて、天下の大道に通ぜざるは、これ腐儒のみ。哲學者など云ふものは、大抵此類也。苟くも常識大ならば、學者や、技術家や、才人や、策略家や、みな我手足となりて働くべし。之を一身に見るも、學問、藝能すべて、常識の用をなすべし。

#### 偉人と詩人

膽は大なるべし、心は小なるを要す。古來偉人は、心必ず小なる者也。心大なるものは、壯士となるが、とゞのつまりなるべし。情は熱すべし、胸は冷かなるを要す。胸冷かならずんば、浮世に事業をなす能はず。彼の詩人は、情のみ熱するもの也。理想は高かるべし、行は低きを要す。行の低きをさけむとするものは、遂に一種の奇人たるを免れざるべし。

#### 青年の心と浮世

浮世の事は、卑くして複雑也。而して青年の心は高尚にして單純也。故に青年の心と浮世とは、常に相衝突す。強ひて浮世に合せむとて、高尚の心を失ふは非也。浮世の事を高めんとするを理想とすべし。唯單純より複雑にせば、外形に於て浮世に適合するを得む。必ずしも全然相一致するを要せず。若し全然相一致せば、社會の進境なきに至る



べし。

### 情に合すべし

利に合するものは利に離る。交際をかたくせむとせば、情に合せざるべからず、これ竹馬の友の、年長じて益々したはしき所以也。要するに、誠實にして、情に合し、胸襟をひらき、妄りに力量を誇らざるは、普通の交際に於て、必ず心得居るべき事也。

### 大なる英雄は大なる國民に若かず

大なる英雄は大なる國民に如かずと云へるは、頗る味ふべきの言也。ハンニバル非凡の人傑なりしかど、羅馬を亡ぼすこと能はざりき。ナポレオンも近古非凡の人傑なりしかど、英國を如何ともする能はざりき。近く之を例せむに、支那の李鴻章は、或は我國の伊藤公、又は陸奥伯などよりも、人物として上らしけれど、我日本國民は大なる國民也。日清戦争が日本の連戦連勝に歸したるも、亦何ぞ怪しむに足らむや。

大なる國民とは、國民として大なる所あるを謂ふ也、大國の民の謂に非ず。支那人の如きは、大國の民なれど、大なる國民にはあらざる也。

### 獨立と共同

獨立と共同とは、決して矛盾せるものにあらざる也。一人の名譽、やがて一團體の名譽となると共に、一人の耻辱、亦一團體の耻辱に歸す。我一人の名譽よりも、一團體の名譽、國家の名譽と、區々たる利己心をはなれて、大なる處に注目するこそ、達人とは云ふべけれ。

### 長命の眞意

長命の眞意は、活動を以て算せざるべからず。年齢のみを以て算すべきに非らざる也。有爲の士にして四五十にして死するものあれば、人皆之を惜しみ、甚しきは曰く、學問に、事業に、力量ある秀才が早死するは、實に其人の不幸のみならず、國家の不幸也。而して其死因



は多く過度の勉強にあれば、其人國家に對して罪なしとせずと。然れども、一考せよ。大に勉強したるが故に、大に活動し得るの力を得たる也。もし勉強せざりしならば、かゝる活動は爲し得ざりしならむ。死因を致したるも勉強にして、活動を爲すを得たるも亦勉強也。勉強せずして、即ち大に活動するの力を得ずして、長く生きるが是なる乎。大に勉強して、短き間なりとも、大に活動するを得るが非なる乎。これ大に考ふべき點也。

#### 山中鹿之助

鹿之助は、余が最も欽慕する偉人の一也。太平の世に余が悠々として吟行せし出雲の山川は、三百餘年の昔、鹿之助が長劍を揮うて苦戦せし地也。故跡蕭條、また碧血の痕を見ざれども、鹿之助の事業は、萬古生命あり、其英魂は天地と共に朽ちず。嗚呼人生夢の如く、生前の榮華も幾時ぞ。尼子毛利二氏の興亡、揆を一にせざりしも、共に

達する處はこれ墳墓。恩讐同じく貉一邱、薤上の露消え易く、白骨再び起たず。唯だこの間にありて、鹿之助の丹心、天地の間に留りて、長へに汗青を照すを見る。嗚呼、鹿之助の如きは實に萬古國民の儀表にあらずや。

#### 尊ぶべきは職務に忠なる人

現に我従事しつゝある職務に忠なる人は、世に最も尊ぶべく、最も敬すべき人也。將官としてさまで功勞のなき人よりも、兵卒として最もよく兵卒の任務をつくしたる人がえらき也。價值ある也。一將功成つて萬骨枯るとは、昔の事、明治の聖代、金鷄勳章の制を定めさせ給ひて、將官として殊功ある者之を受け、將校として殊功ある者之を受け、兵卒として殊功ある者亦之を受く。金鷄勳章に優劣なし、唯最も能く其任務につくしたる者の胸にかゝやく也。其地位の高下を問はざる也。



行路難に打勝つの勇氣

行路難、不在水、不在山、唯在人情反覆間、人の世に立たむには、行路の難に打勝つの勇氣なかる可らず。志の向ふ所、山を見ず、海を見ず、千難萬苦を意とせざるの覺悟なかる可らず、殊に奇功を奏せむと欲せば、最も冒險の氣風に富まざるべからず。由來虎穴に入らずむば虎子を得ず。勇敢猛烈、萬死且つ辭せざる快男子にして始めて絶代の奇功を奏すべきのみ。

人を見るの明

人は世に孤立する能はず。或は人に使はれ、或は人の上にたち、事業を爲す上に協力せざるを得ず。即ち世に立つに同志なきを得ず。而して交はるに友なきを得ず。従つて人を見るの明あるを要す。

人はよくいつはるもの也、又よく飾るもの也。深切げに見ゆるもの必ずしも深切ならず。馬鹿げて見ゆるもの、必ずしも馬鹿ならず。若

し誤つて人を信ずることあらば、飛んでもなき迷惑を蒙ふることあるべし。事業爲めに失敗することあるべし。甚しきは我一身を誤ることあるべし。

なれくしき人

一見直になれくしき人を、親切な御方と思ひて身をまかすべからず。多くはこれ輕薄才子也。

情愛のありすぎる人

はじめに情愛のありすぎる人をあてにすべからず。熱し易きものはさめ易ければ也。

お世辭なき人

むつとりしてお世辭なきものを、いけすかない人と思ふべからず。

親しく交はれば案外に情愛の深きもの多し。

口先のうまさ人



口先のうまさ人を働あるものと思ふべからず。小才ありて、眞の智  
恵なきもの多し。

似て非

材能あるものと、法螺吹くものとは、似て非也。沈勇なるものと柔  
弱なるものとも、似て非也。

氣前よきと、しみつたれ

男の氣前よきは、氣持よきものなれど、取れば取るほど金いりて、  
家政はゆたかならざるべし。しみつたれなるは、齒がゆきことあれど  
食ふには困ることなし。

女の前

女の前にえらさうに見せかけるものは、概して世間には幅のきかぬ  
ものなり。女の前におとなしき人、案外に世間へ出て、は勢力あるも  
の多し。すべて、女に對して、えらがつたり、自慢したり、氣取つた

り、めかしたりするものには、ろくなものなし。

人は見かけによらぬ者

人の前に出て、は、蟲も殺さぬやうにおとなしきも、妻子に對して  
は、傍若無人なるものあり。世人には冷かなるも妻子にはのろきもの  
あり。人は見かけによらぬもの也。

多く金のかかつた人

しやれを言ふこと上手にして、かくし藝あるは、必ずや、學資以外、  
多く金のかつた人なり。

身持よからぬもの

容貌風采を自負し、頭髮、衣裳、携帶品を氣にする人は、概して身  
持よからぬもの也。

人さまぐ

情もろくして、智くらき人あり。情もろきも、智の明かなる人あり。



意志強くして、利口すぎる人は、同情に乏しもの也。

面前に悪口いふ人

面前に悪口言ふ人は、根性案外によきもの也。眞に根性の悪き人は、決して人の前に悪口言ふものに非ず。

固き人、才氣ある人

かたき人は融通さかざれど、過なし。才氣ありすぎる人は、まかりちがへば大に失敗せむ。

智慧ある者は必ず一癖あり

智慧あるものは、必ずひと癖あり。全然婦女子のお氣にかなふものに非ず。毒氣なく、いやみなく、癩氣なくさつぱりして、小才あるものは、或は婦女子の氣に入るかも知らねど、たいした人にはあらず。

大人物に好男子なし

頼朝は大頭也。秀吉は猿面也。家康は黒面也。概して大人物には、

好男子なしと知るべし。

なま物知り

なまもの知りの害あるは、半熟のくだもの、害ある如し。男も、女も、學ぶ以上は、半熟以上まで進みたきもの也。

食はせもの多し

傲慢にして法螺ふき、よく人をけなすものは、其本心は案外に愚直なるべし。罵る人よりもよい加減に機嫌とりてさからはぬ人が反て油断ならぬもの也。悪奸の人は、表面はやさしくして、妄りに人にさからはず、人を怒らせず、一目決して奸悪には見えぬもの也。口に正義を唱へ、いやにしかつめらしき顔をなし、無暗に廉潔ぶり、方正ぶるものに、食はせもの多し。うかと信ずべからず。

人を容るるの量

世に我理想にかなへる人あるべしとも思はれず、又全く我と同じき



人あるべしとも思はれず。必ずや人には我好む長所あると共に、また我嫌ふ短處もあるべし。もし短處のみを見れば、世人はみな悪人也。人を見るの明ありて、長所は何、短所は何と識別し、而して短所の爲めに長所を忘れず、長所の爲めに短所を忘れず、短所あるを知りて之を棄てず、偏に其長所を利用して世益をなすべき也。これ之を人を容るゝの量と云ふ。

墮落は皆悪友の誘ふ所

君子の交りは淡くして清く、小人の交りは狎れてみだら也。何人も悪友をさけて善友を望まざるはなけれども、凡俗の常情、淡き交りは面白からず、知らずく友悪と密接する所以也。多數の團體に、一二の悪人あるも、さまた影響なけれども、悪人増して、團體腐敗し來れば、折角善良なるものも、爲めに感化せらる。而して悪友の誘引、知らずく人を墮落の淵に導く。はじめより一人にて墮落するものある

を聞かず。墮落はみな悪友の誘ふ所也。危い哉。

味方としても頼もしからぬ人

一定の主義を抱いて、之を斷行せむとすれば、味方も出来るべけれど、敵も亦多くなるべし。敵を恐るゝならば、初より主義なきに若かず。骨なく、主張なく、甲の機嫌をとり、乙にも愛想よくし、圓轉滑脱、所謂八面美人とならば、敵なかるべし。敵はなけれど、かゝる人は、味方として頼もしからぬ人也。

氣力ある者は進んで戦へ

苟くも我道を行ひ、正義に忠實ならむとする者は、敵多きを覺悟せざるべからず。敵と戦ふの勇氣なかるべからず。我れ敵を倒すにあらずんば、我れ敵の爲めに倒さるべし。かくて浮世は長へに無形の武器にて戦ふ修羅の巷也。氣力ある者は、進んで戦へ、正義の爲めに、主張の爲めに、國家の爲めに、人道の爲めに。



獨立獨歩すべし

『誤れり獨り行くべき天地に、人の子の肩手をかけて見し』とは、詞友鐵幹の歌なるが、感慨いと切なるを覺ゆ。男兒生れて地に墜つ、たゞ當さに獨立獨歩すべし。妄りに人に依頼すべからず。

精神上の老病人

獨立とは、我身の力を以て世に立つ也。人に手を引かれざる也。人の肩にすがらざる也。杖に扶けられざる也。陸放翁歌つて曰く、『少年射虎南山下、惡馬強弓看似無、老病即今何可說、出門十步要三人扶』と。老病の身、人に扶けられて漸く尺寸の地を歩行す。これ大に憫れむべけれども、老病なれば、止むを得ず。然るに社會の生存競争場裡、年壯に體健なるも、人に扶けられて、漸く世に立つ者少なからず。これ精神上老病の人也。即ち意氣地なきもの也。

一種の愚物

自尊とは、自から恃む所ある也。妄りに他の鼻息を伺はざる也。他の髻の塵を拂はざる也。他に媚附せざる也。小段に遭うて忽ち凹む癖に、小譽を得れば、忽ち鼻をうごめかし、さらでだに人として多少のうぬ惚なきはなきに、もと村夫子などに一讀三嘆、天下の秀才と安賣りの評を貰つて、我こそは古今獨歩の才人と、氣位のみ高くなりて、鳥なき里の蝙蝠なるを知らず、世間を馬鹿にし、人を鼻の先にてあしらひ、終に眼中には國家もなく、帝王もなきに至るもの少なからず。これ一種の愚物也。眞の自尊の人に非ず。

希望の大なる人

聖賢を希ふ心なきものに、聖賢の道をさづけたりとて、何等の効もなし。希望大ならば、眼前の苦痛を忍び、誘惑物にまどはず。よしやその希望通りにはなり得ずとも、その行路が楽しく、面白く、精神自から活氣を生ずる也。



有望の少年

榮譽心、胸に燃え、廉恥心強く、勝氣にして負くるを嫌ひ、自信ありて眼中人なく、小成に安ぜず、小才小藝にはこらずんば、人物を修養する上に於て、既に堅牢なる土臺ある也。かゝる少年こそたのもしけれ。教へても教へばえがある也。將來有望の少年とは、實にかゝる少年を云ふ也。

志の立つ也

渴せる者が水を欲する如く、飢ゑたる者が食を求むる如く、俗人が金をほしがる如く、迷信者が神佛にたよりて現世來世の幸福を冀望する如く、一心專意有徳有用の人とならむとするは、これ即ち志を立つる也。

道徳に入る二途

道徳に入るには、理性よりもすべく、情よりもすべし。理性のみよ

り入らば、利害得喪に拘はることあるを免れざるべし。情より入れば根底かたし。

圓滑にして氣骨あるべし

人は圓滑にして氣骨あるべし。圓滑は社會に處する所以也。氣骨は主義を貫く所以也。

好運の一半は智の致す所

運命とは、あきらむるに都合よき名目なれども、少なくとも、好運の一半は、智の致す所にして、不運の一半は、智なきの致す所なるを知らざるべからず。

運の悪きは、智の劣れる也。運の在る處は、道遠し。眞に智あるものにして、はじめて運の何物なるかを知るを得べし。智の足らざるもの、何ぞ運のありかを知らむや。

社會は一局の碁也



社會は、要するに一局の碁也。ささの見ゆる者は成功し、見えざる者は失敗す。愚なる者は、明日の事もわからず、一步ささも見えず、恰も闇夜提燈なくして、歩行するが如し。たゞ世の潮流にたゞよはされて、一生を終はる也。先見の明ある者は、未來を豫知す。十年ささを見ぬくものあり、百年ささを見抜くものあり。

それ以上は天授也

先見の明を得むとするものは、一身並に社會の過去に注目せよ。静慮せよ。而して能く斷じて猛進せよ。恐怖の心あるべからず。それ以上は天授也。運とあきらめて可也。

好むが故に好む也

人誰か一身の安全をさらはむや、一家の繁榮を願はざらむや。然れども、血あり、骨あり、涙あるものは、國家をよそにする能はず、社會をよそにする能はず、主義なきを得ず。従つて浮世のあらゆる苦痛

と闘ふことを辭せざる也。節義は黄金の爲めに賣らず。主義は一死の爲めに曲げず。義理ばることは身の損となること多きを知るも、止むにやまれぬ矢竹心の一徹、世俗の毀譽をよそに、唯我志に殉じて甘心す。這般の心事は世の所謂、お利口連中のよく解する所に非ず。何故と問ふこと勿れ。下戸に酒の味のわかるべき筈なし。好むが故に好む也。

成功的氣質

何の藝も、鍛練に鍛練をつみ、工夫に工夫をかさねずんば、決して上達するものに非ず。何の業も、失敗に屈せず、困難を忍ばずんば決して成就するものに非ず。古來事業をなし、もしくは藝能を以て家を成せるものは、必ずしつツこき氣質ある者也。

不成功的氣質

しつツこきことの反對は、さッぱりしたること也。さッぱりして居



ることは、社交上の氣質としては、必要なるもの、一なれども、職業  
藝能の上には、斷じて不可也。

思考力は沈着の生む所

沈着にして物事を思考するを好むといふ氣質は、何事をなすにも、  
先づ第一に必要な事也。沈着なれば、落付きてあわてず、機に臨み  
て、よく斷ず。思考力に富めば、計畫に長じ、事理を辨へて、頓馬な  
事をせず。而して思考力は概して沈着の生む所也。

凡流以上

凡流以上に超脱せむと欲するものは、熱せざるべからず。今日熱し  
て、明日さますべからず。凝らざるべからず、十年一日の如くに凝り  
かたまらざるべからず。

こむ玉と五尺の體

氣なる哉。こむ玉の圓くふくらみて、よくはづむは、中に空氣充滿

すれば也。空氣少し抜くれば、少し凹みを生じ、多く抜くれば、多く凹  
む。人の五尺の體が、目的を有して、よく活動するは、氣あるを以て  
也。氣滿つれば、少しばかりの病氣ありとも、何處にか消え去る。氣  
なくなれば、病氣つけこみて、來り侵す。一氣の奔放する處、そこに  
精力あり。そこに事ある也。

沈 勇

人は死ぬるまでも活氣なかるべからず。然れども、深く鋒鉞を藏す  
るものあり。その外面に活氣なきを見て、意氣地なき人と思はゞ、恐  
らくは誤らむ。わざと之を外面にあらはしたがるものあり。もし之を  
眞に元氣ある人と思はゞ、又恐らくは誤らむ。沈勇は、多くおとなし  
き外形を有す。つけ元氣の外形は、膽氣の外形と分ちやすからず。概  
して、小才を弄するものは、眞の智惠なく、元氣ぶるものは、子々た  
る小丈夫也。



盲進

何等のつかまへ所もなきに、盲進するは、智なきわざ也。智なきものは、砂の上に家をたて、安全なりと思ふも、何ぞ知らむや、一陣の風に忽ち吹き倒されむとは。

無鐵砲と果斷

胸中何等の成算もなきに、妄に斷行するは、餘りに無鐵砲なる事也。智者は與みせず。さればとて、結果の明かに見ゆるを待ちて、然る後に始めて着手するは誰でもよくする事也。決斷といふべき程のものにあらず。非凡なる人士は、先見の明あり。されど、如何に先見の明あればとて、さきの事が、十から十迄、見えすくものに非ず。一半はたしかなるも、一半は不定なり。爲めに身代を棒にふらざるを得ざるこゝとあるべく、一命を失はざるを得ざることもあるべし。而かもよく斷じ、よく行ふ、果斷とは即是也。

恭儉士に下る

恭儉、士に下るといふことは、常に人に長たるものゝ心得居るべきことなるのみならず、身を世に處せむには誰も心得居らざるべからざることも也。

蠻勇や、膽氣や、才幹を恃んで、人に高ぶれば、或る點までは、人々に服すべし。服せずとも、利用するに都合よければ、面従すべし。下りて、敬して遠ざくべし。更に下りて、反抗すべし。畢竟するに、多く敵を作る。竟に人を心服すること能はざる也。

人に成功する能はず

頭角をあらすには、才氣、膽氣などをふりまはして、我をえらく見する必要があるべし。されど、妄りに之を朋輩に加ふれば、感情を害すべし、妄りに之を部下に加ふれば、難有味がうすらぐべし。一方には、十分に力量ありて、一方には、自から卑下せざるべからず。憫れ



むべし、世の才子の域を脱せざるもの、才を恃むの餘り、下らぬ處にも威張つて見たく、我才をあらはすに急にして、却つて人の恨を買ふを知らず。或は事に成功すべきも、竟に人に成功する能はざる也。

思ひ立つ日は黃道吉日

着手は半ばの成功なりとは、云ひ得て切なる哉。餘り大事を取りすぎ、思案をしすぎては、活氣なくなりて、自から萎縮すべし。凡そ何事をなすにも、幾多の障害あり、困難あり、手を出し難き事情ある者也。事情に拘はり、困難に凹み、障害を恐れ、戦々兢兢々として、取り越し苦勞のみなし居りては、竟に着手するの機を逸すべし。日本の俗諺に、思ひたつ日は黃道吉日と云へるも、この意に外ならず。

余は繰返す、着手は半ばの成功なりとは云ひ得て、切なる哉。更に余をして一轉語を下さしめよ、曰く臆病は半ばの失敗也。

冒險が必要

氣のよわきもの、神經の過敏なるもの、何事もわかり過ぎて蠻勇のうせたるものなどは、いつも大事をとりすぎて、思ひ切つた事出來ず、おち氣がつきて、好機を逸すること多かるべし。世に生れたる以上は世と戦ふの覺悟なかるべからず。氣の強さを要す、負けじ魂あるを要す、自信あるを要す、熟練するを要す、或程度までは、向う見ずなるを要す。即ち、或程度までは、冒險が必要也。

入徳の一門

手紙は千萬年に残るかも知れず、何人の前に出さるゝかも知れずと覺悟して、之に立派なる事をかゝとすれば、是非とも、かたく身を持して、信義を守らざるべからず。行の正しき人にして、はじめて立派なる手紙がかかる也。これ亦徳に入るの一門たらずんばあらず。

克己の最良法

智あるものは、貯蓄して浪費せず。現在に生活せずして未來に生活



すれば也。

あとは野となれ、山となれ。快を一時に取りて、明日はのたれ死せむもいとほざるは、氣合の面白き男に往々見る所なれども、靜に一思せよ。今日ばかりの我世には非ず。大に散ぜむとせば、大に貯蓄せよ。志遠く大ならば、遠く遙かなる未來の聲、われに未來をさ、やく。未來のたのしさに、現在の苦は、苦にもならず。己れに克つの最良法は未來の大望を抱くにある也。

喉元すぎて熱さを忘る

恒産なきものは恒心なしとは、説き得て切なる哉。金に窮して質屋の番頭に頭をさげ、豚にも均しき高利貸に頭をさげ、知人親戚に頭をさぐる時は、よくく意氣地なき男と、敵愾の心、自から起るも、かなしや、凡夫の常情、喉元すぎて熱さを忘る。金ある時に、金なき時の心を持つて居ればよきも、さて金入りて見れば、折角ひきしまりし

心も、水にふくれる海綿の如く、金に自から膨脹す。天生我才、必有<sup>レ</sup>用、千金散盡又還來と歌ひし李白も、老いては、さうも行かざりしやう也。

裸百貫

裸百貫、之まことの男子ならずや。男一疋が、朝夕、鏡と首引をなし、白粉を施し、借金してまで、身の廻りをかざり、つんとすまして道をねりゆき、行人の目送を博し、兒女の憐を迎へて、得たり顔するは、竟に何の意味ぞや。

青年の身の廻り

青年にして身の廻の立派なるは、人品と轉比例をなす。もしくは識見と轉比例をなす。而して墮落とは正比例をなす。身なりにかまはざるは、心を磨くに専なれば也。志大にして細事に拘はらざれば也。世俗にもてはやされ、婦女子にもてることを雀の囀るほどにも思はざれば也。



ば也。

### 奢侈を抑制する方法

奢侈を抑制するは他なし、社會をして物質的以外、精神的快樂を知らしむるに在り。文學の眞趣味を解せしむるに在り。殊に上層に立つものは、己れひとりの社會にあらずと云ふ事を解し、又我爲す所の意想外にひろく且つ深く影響することを解して、自から物質的情慾を抑ふるに在り。我力にて得たる金を我道樂につかふ、これ我權利也、我自由也、安んぞ影響の如何を問ふを要せんやとは、社會の何たるを解せざる俗人の得々として口にする所、而して社會に病根の絶えざる所以也。

### 短氣は損氣

物により、場合によりては、櫻花のばつと開きて、ばつと散るやうなる氣合も必要なれども、大事をなさむとするものは、決して快を一

時に取るべきに非ず。現在に生活せずして、未來に生活せざるべからず。一時の快の爲に、一生の悔をのこすべからず。未來の希望の爲めに、しばしの不快、恥辱、失敗を忍ばざるべからず。古人戒めて曰く短氣は損氣と。

### 人生と航海

希望あり、目的ありて、黽勉して業をはげむは、これ舟に舵あり、羅針盤ありて、海を航する也。希望を失ひ、目的をあやまりて、自暴自棄となるは、これ舵なく、羅針盤なくして、無暗に舟をやる也。人の一生は、舟の海を渡るが如し。舵と羅針盤とを具ふるも、なほ暴風雨あり、怒濤あり、暗礁ありて、その航路の邪魔せむとするに、舵と羅針盤とを失ひては、航海が出来るべきものに非ず。如何に不平ありとも、氣にくはぬことありとも、腹の立つことありとも、海に浮びたる舟也、舵と羅針盤とは失ふべからず。



恃む所

龜に甲あり、蜂にはりあり、牛に角あり、象に鼻あり。これみな護身の利器にして、以て自から恃むに足る。世に自ら恃む所なき人こそあはれなれ。

人、社會に雄飛せむには、更なり、單に生存せむにも、恃む所なかるべからず。恃む所とは身を立つる所以なり。學才にてもよし、世才にてもよし、文才にてもよし、政治、軍事、商業、藝術などの才能にても可也。何か人並、若しくは傑出せる材能あれば、恃む所あり。恃む所ありて、はじめて社會に闊歩するを得べし。

運命の決定期

人の一生の運命の大部分は、僅々二十歳前後の數年間の勉不勉によりて定まる。この際の苦痛を忍んで勉むれば、身に恃む所を得て、將來社會に闊歩するを得べし。苟安を貪りて遊惰にふけらば、身に恃む所

を得ずして、一生社會の下層に沈淪せざるを得ざるべし。

金錢

金錢上の事は、口にするも、こゝろよからざるものなれど、其實、人の生活には、重大なる關係を有す。親子、兄弟、師弟、朋友間の感情の衝突、大半は、金錢にもとづく。

算盤勘定

何事にも算盤勘定をもち出すは、面白からざれど、金錢上の權利はむしろ男らしく思ひ切つて言ふべし。口に出さずして、かげにてぶつゝ不平をこぼすにはまされり。

掃溜と金

はきだめと金は、きたなくならざれば溜まらずとは、一理ある言なれど、人は元來金を溜めに生れたるものに非ず。餘りお人好なるは、賢とは云ふべからざるも、餘りに慾張り一方の義理知らずなるも、は



めたはなしに非ず。正當なる手段を以て、入るの多からむことを圖るべし。

正當の金

人はたゞ正直に働きて、正當の金を得べし。得る所は少なけれども良心は満足す。身體の逸するもの、必ずしも幸に非ず、身體の勞するもの、豈に必ずしも不幸ならむや。

身分相應

携帶品、道具の類は、實用を辨ずれば足れり。その上の慾を言へば品質丈夫にして、長持ちのするを尙ふ。今一步すゝめば、少し贅澤なるも、身分相應なれば可也。すべて貴顯富豪を真似て、身をかさり、人に誇り、實用よりは、みえを先きにし、贅澤をきはめ、善美をつくさむとするは、甚だ以て不心得也。

猫に小判

私利を營みて、子孫の計をなし、巨萬の財をつみ、大厦を起し、別莊を造り、美衣をまとひ、美味に飽き、妻妾に傲り、世俗にもてはやされ、物質的快樂を逞しうして一生を終らむことは、世の凡人の理想とする所なるべし。斯る人共は、たゞ私利私慾あるを知る。義侠や、公憤や、獻身的事業や、博愛の事業や、竟に猫に小判也。たゞ一身が物質的快樂を逞しうして一生らくに暮らせればよしと思ふ人に、人道を説くべくも非ず。物の哀を説くべくも非ず。

耳をふさぐべし

人生耳をふさぐべきこと多し。われに阿るものに耳をふさぐべし。紛々たる世俗の毀譽に耳をふさぐべし。されど忠告には、耳をふさぐべからず。

目をふさぐべし

目をふさぐべきこと多し。悪友の行爲にふさぐべし。不義の富貴に



ふさぐべし。奢侈に塞ぐべし。されど、知識の爲めに目を塞ぐべからず。

口をふさぐべし

口をふさぐべきこと多し。かげにて人の悪口言ふべからず。おしやべりして、うかと秘密をもらすべからず。一身の不幸不平を口にすべからず。されど、眞理正義の爲めに口をふさぐべからず。

紳士と學生

紳士が學生の眞似をするは望まじき事也。然るに、今の世、學生にして紳士の眞似をするもの多けれど、紳士にして學生の眞似をするものは、幾んど之なし。さらでだに、高潔なる學生も紳士となりては、世の惡風に化せられて、墮落し易きものなるに、學生にして早已に紳士を學びて、墮落せるもの、行末は如何にぞや。

自惚

自惚とは、我身を恃むの謂也。人は概して世上の聲價以上に、我身の價値を認むるもの也。即ち自惚は實際の價値よりも更に大也。人の活動もこれに基づき、進歩もこれにささす。自惚なくなれば、自暴となるべし。我身に愛想つくれば、其人は生きながら死したる也。また何ぞ進歩あらむや。

乗る者と挽く者

人力車に乗るもの幸にして、人力車を挽くもの不幸なる乎。乗るものは逸す。然れども運動せざれば、胃の消化悪く、何やかやの屈托に顔色青ざめたり。家にかへりて、佳肴を食ふも、更に其味の美を感ずる能はざる也。挽くものは勞す。然れども、よく運動するを以て、身體は壯健也。歸り來りて澤庵をかじるも、餓ゑたる腹に、非常の味を感ず。車夫の収入は僅々なるべし。然れども苟くも足るを知れば、九尺二間の裏店に住まふも、なほ安樂也。



何故に佳人薄命才子不遇か  
古人曰く、佳人薄命、才子不遇と。佳人豈に悉く薄命ならむや。自から色を恃むが故に、薄命なる也。才子豈に悉く不遇ならむや。自から才を恃むが故に不遇なる也。

他山の石

古人曰く、他山の石以て玉を攻ぐべしと。言に、行に、我修養に資するに足るべきもの、豈にひとり偉人豪傑のみならむや。

名ある人、地位高き人、事業をなし遂げたる人などをば、世俗はひやみに難有がる者也。之に反して、名もなく、地位もなき人をば馬鹿にしてかゝる者也。難有がるの餘、その言ふ所、行ふ所、金科玉條とも心得、龜鑑とも仰ぎ、馬鹿にするの餘、その言に理あり、その行ふ所に道あるも、なほ齒牙にだにかけざる也。誤れる哉。

熱狂の奇才

余は常識の價値を認む。されど餘り常識にすぐれば、平凡となり、通俗となり、小器用となり、終に大に奇なる能はず。何事も利害を打算するに急なるを以て、大なる失敗なき代りに、大なる成功もなし、一望平野、高山なく、大川なし、熱して狂するの奇才なくんば、われ世上の落寞なるに堪へざる也。

氣

古人曰く、陽氣發する所、金石亦透る、精神一到、何事か成らざらむと。氣は發達の最大要素也。氣のある所、發達あり。氣のなき所、發達忽ち停止す。樹木も氣盛なれば、繁茂することも盛也。氣なくなれば、則ち枯木となる。人も亦此の如し。氣壯なる間は、發達あり、活動あり、また事業あり。氣衰ふれば、老朽す。必ずしも年齢の如何に關せざる也。されど、年老ゆれば、氣、衰ふるが常也。また窮すれば、氣、萎微するが常也。老いて氣益壯に、窮して氣益振ふもの、よ



く大事を成就す。

孝行の名を得るは不幸なる家

孝行の名を得るは、必ず不幸なる家也。身體上、學問上、品行上、事業上、すべての點に於て、親の心を安んぜしむるが、何よりの孝行也。時には國民としての義務をはたす爲めに、無分別なる親の心を苦しましむることあり。これ所謂大義親を滅するものにて、止むを得ざることと知るべし。

子に對する愛情

子に對する愛情とは、甘やかすの謂に非ず。しつけするとは、かみつくやうに叱るの謂にあらず。

妻は衛生上の美人がよし

家に妻君の病めるは火鉢に火の消えたるが如し。宴會につれ行き、共に散歩する場合は格別、家にありては、妻は衛生上の美人なること

よけれ。

色美なるは多く浮氣者

色美なるもの、多く浮氣者にして、學問藝能のすぐれたる者に顔の見苦しきが多し。古人曰く、美人多く薄命なりと。その薄命なるは天なる乎。抑も自から招く所なる乎。

婚禮の媒介人

婚禮は、人間一生中、その人に取りては、最も重大なる事件也。之れが媒介人たるもの、役も、従つて重大也。然るに之を輕視して、よい加減なこととして、駿馬に痴漢をのせ、才子をして醜婦に伴はしめ人の一生を誤らしむるは、その罪決して輕しとなさず。

手鍋さげても

賢にして情あつきもの、これ良人として選ぶべく、また細君として選ぶべし。かくて意氣相投じたる夫婦ならば、愛情長へに温なるべく、



長へに幸福なるべし。今地位ひくゝとも、やがて、高まらむ。今収入  
少なくとも、やがて多くならむ。よしや一生地位ひくゝ、収入少なく  
とも、情に於て相合すれば、夫、婦を愛し、婦、夫を敬し、手なべさ  
げて、苦しき生活を營むが中にも、何となく楽しく月日が送らるゝも  
の也。

#### 夫婦間の眞の鏡

子を夫婦間の鏡といふは、抑も末也。夫婦間の鏡となるものは、愛  
情也。裸百貫のその人となりを受する事也。その愛は、富によりて増  
さず、貧によりて減ぜず、地にありては連理の枝、天にありては比翼  
の鳥と思ひ込みてこそ、茲に夫婦間の幸福は得らるれ。

#### 生物を見よ

見よあらゆる生物、子をうみて、子を育つる能はざるものなきに、  
人間のみは、子を生むも、之を育つる能はざるものあり。而してあら

ゆる生物、子の世話になるものはなきに、人間には、子の厄介になる  
ことをあてにするもの多し。誤れる哉。

#### 細君は床の間の飾物に非ず

誤れる哉、今の人、妻を娶るに、容貌を問うて、教育を問はず、教  
育を問うて健否を問はず、誤れる哉。色の白きは、七難隠し、容貌の  
美は、一時伉儷甚だ好からしむるも、元來細君は床の間の飾物に非ず。  
且つ色は衰へ易きもの也。目についた細君、やがて鼻につくべし。女  
房は家のかためとかや。先づ第一が人柄なり。

#### 焼餅は熱愛の結果

女子は元來おとなしきを尙べども、愛には熱せざるべからず。焼餅  
やくは、愛に熱する自然の結果也。わが満身の愛をさゝげて、夫に盡  
すに、夫たるもの、我をよそにすれば、角を出して可也。これ決して  
女子の不徳に非ず。



婦人の心得

愛嬌とは、妄りに秋波を注ぐの謂にあらず。すなほなる女とは、必ずしも、何でも、男の言ふことを聞く女の謂にあらず。

夫婦喧嘩は犬も喰はず

家庭に於ける第一の幸福は、夫婦相和すること也。之に反して、夫婦相和せざるは、家庭の不幸の最も甚しきもの也。夫婦喧嘩は犬も喰はずと云へり。而して夫婦喧嘩は餘り狎れ過ぎて起るもの多し。所謂痴話ぐるひのこうじたるもの也。

夫婦間には敬意を要す

夫婦の間には幾分の敬意を要す。女つけあがりて横着になり、我儘になり、本能的態度をほし、癢にさはるやうな事ばかりされては、如何に始めに目につきし女房とても、終に鼻につかざるを得ず。故に古人戒しめて曰く、お互に婚禮の晩の心持を忘るべからず。

人の過失を恕せ

人をそだつるもの、人を使ふものは、恩あると共にまた威なかるべからず。時には、うはべに怒つた顔もせざるべからず。されど、人は何人も思ひもかけぬしそこなひあるもの也。偶然の過失よりわが器物を損することもあるべし。かゝる時は、何人もわが悪きことは自覺し居る故に、むやみに叱るは宜しからず。たゞ氣の毒に思はするやうに小言云ふべし。

よく自から忍んで人の過失を恕すると否とは、紳士、貴婦人と、

小人、裏店の山神とのわかる、所也。

女の武器

鳥賊の墨汁、私たちの最期屁、いづれも其身を護る武器なり。女にも、武器あり。曰く、涙、是也。

白樂天詠じて曰く、夜淚如眞珠、雙雙墮明月。嗚呼この可憐の



嬌態に接して、何人か腸を断たざらむや。

泣く子の味

諺に曰く、泣く子と地頭とは勝たれずと。さすがに男は長じて泣かざれど、女はいつまでも、泣く子の味を覚え居りて、泣いて、なだめたり、すねたり、言ひわけしたり、ねだつたりして、さまざまの用に供す、されど涙は必ずしも必勝の武器に非ず。理想の餘りに明かなる人や、意志の餘りに強き人は、涙に動かざる也。況んや、だいつ兒的の涙に於いてをや。

女の用語

なべて、貴婦人の用語は、上品なる代りに、禮義的に流れて、躍動せず。藝者、酌婦などの用語は、下品なれども、よく躍動し、人を刺激するもの多し。いづれかと云へば上品なるがよけれど、あまり儀式ばかりでは、旨味なし。醇化して、且つ躍動するを要す。

多辯と沈黙の調和

餘りべらべらしやべるは、品位をおとすものなれども、餘り慎しみ過ぎて、口を開かず、口を開くも、たゞ一應の挨拶應答のみにとゞまりて、毫も胸襟を吐露せざるは、社交上、よろこばしき事に非ず。

男女交際

教育進み、徳育進むと共に、男女交際は許すべきこと也。男女交際と共に、肉交を聯想するは、人を犬猫視する也。教育なき下等の状態を推して、情感の高尙なる者にも及ぼさむとする也。

貴婦人の資格

貴婦人の資格とは、必しも自動車に乗るの謂に非ず。金時計をぶらさげるの謂に非ず。洋琴<sup>ピアノ</sup>をひくの謂に非ず。芝居を見るの謂に非ず。小説をよむの謂にあらず。

柔順と身だしなみ



柔順とは、人の前に猫をかぶつて、かけて舌を出したり、悪口したりするの謂に非ず。

身だしなみとは、必ずしもおしろいをこてく塗るの謂に非ず。

家庭は社會の一大樂土

家庭は眞實也、又愛也。従て詐なき也、争なき也、策略なき也、力瘤を要せざる也。夫婦相和し、親子相親しむ。社會に出て、懐き來れる滿腔の不平も、妻の笑顔を見れば則ち散ず。胸中の心配も、愛兒のあどけなき様に對すれば忽ち消ゆ。終日公事を執掌して、歸り來れば妻子喜んで迎ふ。晩食の卓上、笑聲座に溢る。家庭は社會の一大樂土也。社會より家庭に歸り來るは、なほ終日旅行して疲れたるものが、晩に氣持よき旅店に投ずるが如き也。

祝 祭

誕生を祝ふ也、先祖祭をする也、上巳もしくは端午を祝ふ也、一家

として特有の祝祭あらざるはなし。かゝる祝祭あれば、親戚知己を招くが例也。これ蓋し古人は親戚相會するの機を得せしめむとて、祝祭をなしはじめたるもの乎。

かゝる祝祭に、妄りに多く金を費して、御馳走を多くするは、祝祭の本意に非ず。御馳走は多からずとも、成るべく多く親類を呼びあつむべし。

饗應は志にありて物にあらず

饗應には身分相應といふことを主とすべし。其主とする所は、志によりて、物にあらず。主人にこくし、細君も愛想よく心から喜んで御馳走すれば、何はなくとも、快く食はるゝもの也、殊に日本の上戸は酒と漬物とあれば、先づそれで十分也。多くの御馳走あるを要せず。

贈物は志を表するもの

贈物は、志を表するもの也。之を贈る者は、身分に應じて、其志を



表すべし。あまりにけちな事をするも非なれば、あまりに張りすぎるも、亦非也。之を受くるものは其志を受くべし。決して其物の如何を問ふべからず。

買物

物を買はむには、よしや車賃を損しても、本場の本店にて買ふべし。場末の小店にて買ふべからず。

着倒れよりは食ひ倒れ

京の着倒れ、大阪の食ひ倒れと云へり。いづれも非なれども、食ひ倒れの方がまだよし。多少身體の營養に益する所あれば也。

衣食住の中にて、最も食が大切也。次に住也。衣は最も末也。然るに世俗、殊に婦人は衣を重んず。

困つた細君

なまけものにて、ぶしやうものにて、口が達者にて、尻が重く、ぐ

ずらくする妻君こそ、世に困つたものなれ。夫に垢ついた着物を着せる也。子供にはころびた着物を着せる也。簞笥の中は、めちやくちやにて、何處に何があるやらわからざる也。臺所は狼藉たり。一見、人をして嘔吐を催さしむ也。

貧苦に育ちし娘

貧しき家に生れて、親のしつけを受け、よその娘の如く、美衣をきる能はず、琴、三味線を習ふ能はず、物見遊山に出掛くる能はざるは不幸の如くなれども、實は幸福也。かゝる人は後來たとひ逆境に陥るとも、さまで苦しからざるべく、順境に立てば非常に樂しかるべし。

無邪氣なる女心

世の無邪氣なる女心こそ悲しけれ。余が知れる人の妻、若くして美也。肺をやみて危篤也。その夫何か言ひ置くことなきかと問ふ。答へて曰く、唯一つの望あり。君と共に寫真をとりにて、然る後に死にたし



と。既にして病や、おこたる。夫と共に生きて、寫眞をとらむことをすゝむ。夫何思ひけむ、共にゆくを肯んぜず。さらばとて、獨りゆきて、獨りうつし、歸り來りて曰く、これにて世の中に思ひ残すことなしと。可憐なる女子よ。虎は死して皮をといめ、士は死して名をといむ。卿は死して美貌をといめむとする乎。

樂隱居の弊

老後、子の牖をかじり、己れは樂隱居とならむと思ふもの少なからず。かゝる弊風は一日も早く改良せざるべからず。

維新以前、世祿に衣食せし時代にありては、隱居して可なり。子の牖をかじりて可なり。されど、今や世祿なし。人は働いて衣食せざるべからず。死るまでも働かざるべからず。早く隱居して子の牖をかじるは、これ社會の道德を破るもの也。

日本の紳士に寄語す

語を寄す日本の紳士、我家の爲めに忠實に立ちたらく妻をあはれとは思はずや。にこ〜ほゝゑむ子を可愛とは思はずや。よる年波と幾度の出産とに、よしや妻の顔はやつれたりとも、糟糠の妻は、堂より下さずと云ひしにあらずや。背きては悪口たゝかるゝとも知らず、うはべばかりの笑ひに迷ひ、いつはりの涙を喜ぶ今の紳士こそは、世に馬鹿げたるものなれ。

あれも人の子

『雪の日やあれも人の子樽拾ひ』人をつかふもの、心には慈悲の涙なかるべからず。無學無智の婢僕、やさしくすれば、つけあがりて、人を馬鹿にするものなれば、多少の威嚴なかるべからず。されど、威の中に恩なかるべからず。

人の言に動く者を排斥す

余輩は人を容るゝものを愛す。然れども毫も見識なくして人の言に



動くものを排斥す。

あつて害なき迷信

金毘羅を信ずる者が、毫も恐るゝ所なく、勇んで風浪の中に船をのり出し、奇功を奏し、奇利を獲ることは、何人も見て知れる所なるべし。迷信と云はゞ云へ、斯る迷信は、あつて害なき迷信也。迷信は人の膽氣を大にし、勇氣を壯にす。余は或る程度までは、世に迷信なかるべからずと信ずるもの也。

徳行の基礎

迷信の念なきは、徳行の基礎、其一半を缺けるものと云はざるべからず。されど、われ我國人の古來の氣風を見るに、迷信にかはりて、徳行の基礎となれるものあり。何ぞや。曰く榮辱の念是れ也。

榮辱の念

物をはしがること、恐るゝこと、眞似すること、この三者は最も早く

幼児の心に生じて、一生の行爲を左右するに、最も力あるもの也。少しおくれて、榮辱の念起る。起ることはおそれけれども、徳行を左右するに力あること、むしろ前の三者にまさる。お前はいゝ子だとして、小兒の頭をなづれば、にこゝせざるものなし。お前は楠公だと云へば喜び、尊氏だといへば怒る。幼心にも譽高き人にはなりたき也。

日本人の心を刺撃する語

武士の名折れ、親の面よごし、耻をかゝせる、亭主の顔に泥をぬる、面目なし、人に合はず顔なし、どの面さげて來た、鬨が高い、男子の一分が立たぬ、人の皮かぶるけだもの、こん畜生、すねかじり、腰抜け、骨なし、意氣地なし、祿盗人、卑怯未練などの語は、如何に日本人の心を刺撃するぞや。

無氣力なる者を排斥す

余輩は溫良柔順なるを愛す。然れども害惡に反抗する能はざる迄に



無氣力なる者を排す。

### 日本人の氣象

山上憶良が絶命の歌に曰く『をのこやも空しかるべき萬世に語り告ぐべき名は立たずして』と、これ日本人の氣象をうたへるものにあらずや。

### 紳士

我國史を讀むて、日本武士の如何なりしかを見よ。又英國などの紳士を見よ。又先哲の意見をかきのこしたるものを見よ。決して黄金のみを有するものを紳士とせざる也。品性の高尚ならざるものを紳士とせざる也。四維、即ち禮義廉耻なき者を紳士とせざる也。毫も學問なく、文學美術を解せず、情感の高尚ならざるものを紳士とせざる也。人道を蹂躪して狡智と野卑なる獸慾とを逞しうするものを紳士とせざる也。高利貸しを紳士とせざる也。賄賂に私財を増す議員を紳士とせ

ざる也。見識なく、節操なく、主張なく、骨なく、腸なく、唯器械的に社會の上流に浮動し、無意味に醉生夢死するものを、紳士とせざる也。不義不正の手段によりて財産と地位とを得たる者を、紳士とせざる也。

### 職業の選擇

人はみな難有しと思ふ職を擇んで就かざるべからず。職はその適する所なるを要す。適せざれば、自から難有味うすらぐべし。従つて忠實の念もなくなるべし。妄りに一時の流行を追うて、職を求むべからず。又妄りに物質的報酬の多きをめざして職を求むべからず。

### 向上の氣象あるものを愛す

余輩は向上の氣象あるものを愛す。然れども我地位を得んが爲めに前にあるものを押しつけむとして排斥運動を企つる者を排斥す。

### 榮譽心つよきを要す



人は、榮譽心のよきを要す。之に反して廉耻心なき者は、濟度すべからず。意氣地なしと云はれては残念なり、男子でなしと云はれては残念なりと思ふものは、なほ養ふべし。うそつきと云はれても、破廉耻漢と云はれても、平氣の平左衛門、しやあ〜とするやうになりては、竟に望を屬すべからず。

よくお勤めする人

よくおつとめする人は、他の己れに對して、おつとめせざるを不平に思ふもの也。よく義理をつくす人は、他の己れに對して、義理をつくさざるを怒るもの也。ずべらぼうにして無頓着なる代りに、他の己れに對して、ずべらぼうなるを何とも思はざるは、なほ可也。己れは義理をかく癖に、他の己れに對して、義理をつくさざるを、目くじら立てて、咎立するは、ほめた話にあらず。

圓滿なる人

圓滿なる人とは、智情意の完全に發達せる人也。意のみ獨り發達すれば、殘酷となり、情のみ獨り發達すれば、弱くなり、智のみ獨り發達すれば、こすくなる。智明かにして、而かも同情に富み、同情に富んで、守る所かたく、威あり、やさしき所あらば、人物としてまた何をか望まむ。

多く罰をくふ兵士

あらゆる障害を排し、威勢に屈せずして、所信を貫き、毫も己を枉げざるも、亦一大美德ならずや。服従は飽くまでも、頭腦にしみこませざるべからざれども、あまり羊の如く柔順ならしめなば、罪惡不善の事にも服従するに至るべし。見よ、平生多く罰をくふ兵士の戰場に臨みて非常に勇悍なることを。

追従云ふ者を排斥す

余輩は謙遜なる人を愛す。然れども追従云ふものを排斥す。



執拗

妄りに執拗なるを排斥する莫れ。善事に對して執拗なるは、固より不可なれども、惡事に對して執拗の態度を執るは、大に獎勵すべき事ならずや。惡に強き者は、善にも強し。教育家たるものは、強ひて其執拗を抑へずして、之を善事に適用せむことを勉めざるべからず。

頑冥なる者を排斥す

余輩は硬骨の士を愛す。然れども野老尊大、事理にくらくして頑冥なるものを排斥す。

薄志弱行の徒

智足らず、意志弱く、たゞ情にのみもろきもの、即ち薄志弱行の徒也。情は盲目にして、唯快樂の影を追ふ。而して智明ならざれば、利害得失の觀念に乏しく、毫も顧慮する所を知らず、情の往く所益非也。よしや多少顧慮する所ありて、利害得失に明かなるも、意志弱ければ

心にその非なるを知りつゝ、斷行して之を改むること能はず。邪路に陥り、身を誤る所以也。

小利口なる人を排斥す

余輩は智ある人を愛す。然れども、一步下りて小利口となれる人を排斥す。

虚心平氣なれ

獨逸の諺に、「腹一杯張りては、稽古する能はず」と云へり。實際腹張り過ぎては、机に向ひて書を読むこと懶くなるものなるが、それと同じく、精神上にも、我と云ふもの強く、餘りに自尊、餘りに傲慢にては、修業することが出来ぬもの也。もとより自信の念は強からざるべからざれども、教を受くるに當りて、虚心平氣ならざれば、何事も深く我心に徹せざるべし。器の能く物を容るゝは、虚しければ也。深淵の能く明らかに物をうつすは、波たゝざれば也、學生が修業せむには、



器の如く虚しく、淵の如く静かならむことを要す。

我

青き眼鏡にて物を見れば、物はみな青く見ゆべし。青き眼鏡、即ち我也。かたくななる偏見を懐きて、書物の教ふる所、師の教ふる所に接せば、折角正しき説も、邪説と聞きなざるべし。かゝる偏見、即ち我也。これ我の悪き例也。されど、我全く悪きのみにはあらず。若し全く我を去らば、唯器械的に古人の説を記憶し、批判するのみにて、終に己の説を出す能はざるに足るべし。唯屈從するのみにて、毫も他に加ふる能はざる無氣力の徒ともなるべし。要するに、教を受くる時代に、勉めて我を去り、心を鏡の如くにして、明かに物の道理を了取し而かも其間に我の潜勢力を養ひ、いよいよ自から活動するに至りて、始めて我の念を逞しうせしむべき也。

慢心

己が淺薄なる眼識、幼稚なる嗜好に、一目愚説もしくは拙文と見ゆる者も、愈己の眼識嗜好進むに従ひて、前に見し所の誤れるを悟るべし。水満ちて動かざれば腐敗す。慢心は、學問知識の停滯を致す所以也。十歳の神童、二十歳の才子となり、三十歳の凡人となるは、多くは慢心に基づく。古人が、少年にして甲科に及第するを不幸としたるも、亦宜なる哉。

學問は放心を戒む

孟子曰く、『學問戒放心』と。放心とは、心の專一ならざるを云ふ也。注意疎なるを云ふ也。心茲にあらざれば、聴けども聞えず。看れども見えぬ。放心にして、いかてか學問を修め得べき。學生が教場に臨みて左視右顧するは、其放心を證する也。ひそかに隣席の學生とさゝやき合ひ、ふざけ合ふも、放心の證也。欠伸は益放心を證す。よしや形には放心ならざるやうに粧ふとも、心は他の事を思ひ居るか、もしくは



はぼんやりして居るかにて、師の説く所に耳を傾けざれば、如何なる良師に學ぶも、毫も學問は進まざるべし。何事を修むるにも、爲すにも、注意と云ふことは、第一の要件也。

體操科教員の訓化に待つ

余は斷言す、學生の品性、徳性、人物の修養は、學校に在ては、その半以上は體操科教員の訓化に待つもの也と。

支那にて、禮と云ふは、唯頭をさげたり、腰をまげたりするの謂に非ず。形を以て人を訓化する一種の教育法也。日本にて、支那の禮の教育法に相當する者を求むれば、それ體操科乎。

精神と容貌

精神は自ら容貌にあらはれ、容貌また精神を支配す。精神のたらしなき者は、容貌もまたたらしなし。容貌をひきしむれば、精神も自からひきしまる。

賞品根性の運動家を排斥す

余輩は運動を愛す。然れども學問をよそにして、賞品根性に陥れる運動家を排斥す。

健康は幸福の土臺

身體の健康は、人生の一の幸福也。病身なれば、思ひ切つて勉強すること能はず、又事業をなす能はず、心常に煩悶して苦痛を感ずべし而して生來健康なる人は、慣れて健康の樂しきことを知らざる者もあるべけれど、病身になりて、はじめて健康を羨むべし。健康は實に人生幸福の土臺也。又事業の基礎也。

保健法

健康を保つの法は、飲食起臥など、其度を節するに在り。如何に滋養物なればとて、食ひ過ぎては健康を害すべし。適宜に運動し、適宜に飲食すれば、健康は自からたもたるべし。然れども、精神は本也



身體は末也。身體の健康をたもたむには、常に精神の爽快なるを要す。心配事のある時は、食慾す、まず、身體大に衰ふるを感ずべし。精神の爽快なる時は、之れと反對の結果あり。精神快き時は、身體こゝろよき也。身體のみならず、宇宙間の見ると見るもの、みな快き也。

肉食より粗食

肉食する貴人よりも、粗食する労働者が反つて健康なるべし。肉類は消化しがたければ、運動するを要す。又十分に咀嚼するを要す。肉食して運動せずんば、寧ろ粗食するに如かず。粗食は頭腦を養ひ、精神を練るに不可なりと思ふものあれど、古來の高僧を見よ、粗食して頭腦明確に、深く哲理をきはめ得るにあらずや。

肉慾に飽けば墮落す

人、肉慾に飽けば墮落す。たとへば飽食せる犬のぐたぐたと眠るが如し。肉慾の満足を得ざるは、俗人より見れば、不幸なるが如きも、

精神上の慾に向つて亢進す。進歩せる人の快樂も慰藉もその間にある也。且つや小人閑居して不善をなす。人は精神上となく、肉體上となく、常に暇なきこそよけれ。精神上の慾望も嗜好も盛ならば、安んぞ醜聲を洩す餘地あらむや。

肉體の快樂には苦痛伴ふ

世の肉體の快樂を知りて、精神の快樂を解せざる人は、一種の不幸兒也。肉體の快樂は極はめ盡せば、反て苦痛を感ず。たとへば酒をのみ過ぎて、翌日二日酔に苦しむが如し。肉體の快樂には、苦痛常に伴へり。精神の快樂を解せざる人は、快樂を求めむとして苦痛を得。

不規則は日本人の一大缺點

萬事不規則なるは、日本人の大なる缺點也。先づ身體の攝養に就いて言はむに、規則正しきことは、第一の攝養法也。時を定めて飲食し且つ飲食に度あらば、胃病何によりてか犯すを得むや。然るに飲食度



なく、時なき故、胃の健康を害する也。精神に於ても亦然り。過度に勉強するかと思へば、また過度に遊嬉するを以て、精神爲めに健全なるを得ざる也。

克己力なきもの

克己力なきものは、自から懶惰なるべけれど、自分で自分を支配する能はず、暴飲暴食荒淫に身をもちくづし、ずぼらにて、しまりなく、悪氣はなけれど、事業はまとまらず。

發達する能はざる人

何事も一度やつて見ればすぐいやになり、深く研究せず、念を入れず、ぞんざいにする性質の人は、到底大に發達する能はざるべし。

懶惰は罪惡の母

懶惰なるものは自から不幸を招くべし。否、懶惰は罪惡の母也。だらしなく、ぐずらぐずらと其日を送るものに仕事の出来るべき筈なく、

而かも逸にありて幸福を望むが故に、自から色々の罪惡をしてかすべし。

濟度しがたき人

人は、志望あるを要す。之に反して心の立たざるものは、濟度すべからず。えらくなりたくもなし、大事業をしたくもなし、たゞうまいものを食つて、らくにして居ればよしと思ふ者は、何も藝能なく、何の役にも立たず。家にありては親を泣かせ、社會にありては社會の厄介物也。

張合のなき人

人は勝氣あるを要す。之に反して勝氣なきものは、彈力なき土塊の如し。一つなぐらるれば、そのまゝこはれてしまふ也。洵に張合のなき人也。かゝる人は、惡事も出来まじけれど、到底水平線上に超脱することは出来ざるべし。



人は自信あるを要す

人は自信あるを要す。之に反して、自信なくんば、即ちその人なき也。古來大事業をなしたる人は、みなすべて自信つよき人也。水を泳ぎ得と思ふ自信なきものは、到底水に入ること能はざるべし、この理萬事を推すべし。自信なければ、おち氣がつき、活氣なくなり、事業自から萎縮すべし。終には自暴自棄になりて、何事もなすがいやになるべし。

人は眼識あるを要す

人は、眼識あるを要す。眼識なきの自信は、うぬぼれ也、わからず屋也、頑冥不靈也。何事もわがすることをよしと思ひ、人のすること言ふことは、氣に入らぬ也。かゝる人は、全く見限つたものにもあらず、その眼をあけてやりさへすれば、發達の見込なきに非ず。此の如くにして、かたまりて、年老れば、厄介物也。否、世の笑物也。共に談すべくもあらず。

人は敢爲の精神に富まざるべからず

人は敢爲の精神に富まざるべからず。之に反して臆病なるものは、いつも社會の劣敗者たるを免れざるべし。疑心暗鬼を生ずとかや。思ひ切つて猛進すれば、猛進せらるゝものなれども、ぐずぐずして居れば、果てしなきもの也。折角手に入るべきものも手に入らざるなり。臆病ものには、たいした悪事は出来ざれど、善事も出来ざる也。望を囑すべくもあらず。

人は眞面目なるを要す

人は眞面目なるを要す。うそづくに巧にして、うそつくことを何とも思はず、たゞごまかして世を渡らむと思ふものは、洵にしかたのなき人也。かゝる人は、存外器用にして、物の役にたつこともあれど、到底人の信用を得る能はず。一時はときめく時あるも、必ず終に失敗



すべし。社會の水平線上には出づる能はざるべく、たのもしからぬ人也。

のんき、性急、毒氣

のんき過ぐるも非なれど、性急なるも、亦非也。性急なれば、良き考出でず、粗笨となり、輕卒となりて、過失多し。事を大成する所以に非ず。

才力あるものは、必ずまた多少の毒氣あり。されど、毒氣をあらはすは、その人物なほ小なるに由る。

立身上の一要件

世に身を立てむと思ふものは、妄りに人に金の相談をもちかけざるやうにせよ。妄りに金の相談すれば信用を失ふべし。又威嚴をおとすべし。

古人の格言や諺

古人の格言や諺などは、取りやうによりて、よくもなり、悪くもなる。例へば、果報は寝て待てといふ諺は、懶惰者、意氣地なき者に好遁辭を與ふるやうにも聞きなされるれど、本意は成功をあせる性急者を戒むるにありて、甚だ適切なる格言也。

あせらず撓まず

人生は、一の旅行也。余輩は僅々數年間の毀譽、優劣を争はず、墳墓に達するの間、あせらず、たゆまずして、志を遂げむことを期す。

此心事は世に虚名を趁ふ小才子と語るべからず。

地位と黄金

地位もし得らるべくば、之を得む。されど前者をおしのくるに忍びず。黄金もし得らるべくば、之れを得む。されど親戚朋友の不幸に目をつぶる能はず。

何の爲の慾望ぞ



盲人見る能はざるも、猶美衣をつけむと欲す。聾者聞く能はざれども、猶辯舌の巧みならむことを欲す。

夏の面白さ

人は夏の暑さに苦しめども、面白きとは、春よりも秋よりも夏が多かるべし。高山の巔、脚下に風雨を見雷鳴を聞きて、仰いて月光に對す。其快、花紅葉などの及ぶ所ならむや。溪畔瀧に對して芳茗をす、るもよし。風の通りぬける山樓に夜螢の飛び來るも亦よし。驟雨忽ちはれて、雨の名残虹となるかと思へば、忽ち月になりて千草みな珠を帶ぶるも亦可ならずや。花を言へば蓮あり、百合あり。必ずしも春の梅櫻、秋の七草もしくは紅葉に譲らざるなり。

精神的避暑法

身體上の慾を云へば、夏は蚊の居らぬ處、清水のわく處、清風の通ふ處、清蔭の多き處に住ひたけれど、避暑の法は、必ずしも青山流水

のはとりに往くを要せず、心にさはる雲もなく、常に爽快にして、希望盛にしてその希望に一身をまかすれば、長き夏の日も短かさ也。三伏の空も、さまた暑からざる也。唯此境に達せざるもの、避暑の方法に煩悶す。

艱難汝を玉にす

『憂き事のなほ此上につもれかし、限りある身の心ためさむ』とは、古の壯士の吟にあらずや。山中鹿之助は、三日月を拜して、七難八苦に逢はしめ給へと祈りしにあらずや。艱難汝を玉にす。流ゆるき小川に唸囁する鮒の遅緩にして、急流を上下する香魚の活潑なるを見よ。少時艱難に屈するものは、到底長じて社會の大任を負ふに堪へざるもの也。孟子曰く、『天將降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身』と。由來盤根錯節にあはずむば、利器をためすに足らざる也。



希望の樂地

希望は人生の最大快樂也。されどその眞に愉快なるは、希望の到着點にあらずして、其行路に在り。

眞の涼味

玉の汗を流して暑さに苦しむる人にあらずば、眞の涼しき味を解せざるべし。涼風絶えざる高樓に安坐して、常に氷を嚼むものは、恐らくは、眞の涼味を解せざらむ。終日歩行し、もしくは勞働して、たまたま樹蔭を得、清水を得たる者にして、始めて清涼の眞趣を知るべき也。思へば、安坐閑頰の人こそ、世に最も不幸なる者なれ。

避暑の習慣

避暑といふことは、紳士たるものゝ、一の資格のやうになりたるが如し。大磯も知らず、箱根も知らざるものは、紳士の資格を缺くやうに、自からも思ひ、人も思ふやうになりたるは、吾人の贊同し難き所

也。東京の夏の熱度、九十度内外に過ぎず、之に堪へざるやうになりては、餘りに虚弱也。避暑の習慣は、竟に虚弱を意味し、柔懦を意味し、無氣力を意味す。かゝる避暑を行ひて、一種のみえと思ふの氣風は、吾人斷然排斥せざるを得ず。

ゐざりの旅行

吾人は旅行を好む。即ち高山大川の間に、自然の美を味ひ、浩然の氣を養ふやうになる旅行を好む。大磯や箱根や江の島や、伊香保や、日光や、ゐざりもなほ行くことを得べし。今の紳士は、ゐざりの行く處にゆきて、以て旅行したりと思ふ。その滞在するや、たゞ寝ころぶ也。たゞ酒のひ也。たゞ下らぬ遊びをする也。即ち、座上に蠢動する也。毫も運動せざる也。大磯を知らざるを耻とす。されど富士の絶頂を踏まざるを耻とせず。日光を見て結構を説かざるものなし。されど、日光の山上、蔓延松を蹈みゆき、刀稜の如き劍が峯をわたり、新



雍を過ぎて、御花畑に長嘯するもの、萬人中に、一人ありや、なしや。

### 無錢旅行

無錢旅行も可也。されど無錢ならば飽くまでも無錢にて旅行をなすべし。乞食やかたりの真似をして、他の錢を取りて旅行するは、われ取らず。

### 優娼幫間の真似を爲すべからず

旅行可也、探検可也、角力可也、陸上運動可也、ボートレース可也。唯紳士學生の爲す所、高潔無邪氣にして身分相當の品位をたもたざるべからず。優娼幫間の真似をなすべからず。見世物興行の態度あるべからず。強ひて奇を求め異をたて、俗眼を驚かさむとするが如き小功名心あるべからず。

### 余の最大愉快

余が最も愉快と感ずるは、引きうけたる原稿の出来上りたる時也。

原稿未だ成らずして、止むを得ず違約する時は、最も苦痛を感ず。

### 一身の事に關して怒るべからず

不義に怒らざるべからず。不正に怒らざるべからず。國家の爲め、社會の爲め、人道の爲め、主義の爲めには怒らざるべからず。怒る能はざるものは意氣地なし也、腰抜け也。

されど、一身の事に關して怒るべからず。一身に關して起る怒は、之を忍ばざるべからず。忍ぶ能はざるものは、小人物也。器宇の狭きもの也。到底大事業をなす能はざるもの也。

### 不平罵倒の聲

世に不平罵倒の聲ある間は、なほ志士ある也。仁人ある也。善き草木を培養せむには、惡草木を除かざるべからず。社會の改善を圖らむにも之と同じく、社會に害ある者を除かざるを得ず。志士仁人の胸には熱血あり、眼には涙あり、手には劍なきを得ず。



今の所謂不平家を排斥す  
余は不平の聲を愛する者也。然れども世人の不平は、多く社會上の不平にはあらずして、一身上の不平也。正義の爲めに憤らずして、一身の利害の爲めに憤る也。即ち眞の不平の聲にあらずして、邪慝の聲也、嫉妬の聲也、義を賣るの聲也、卑屈の聲也、賤劣の聲也。余は今所謂不平家を排斥す。

盲従

盲従は一時體裁はよけれども、永くつかず。思慮ある者の、決して喜ばざる所也。表面だけに服従するふりして、其人の見ざる處にて之に背くは、俗人の常なるが、かかる服従は、抵抗するよりも罪ふかし。而して多數の人は、服従したくもなければ、抵抗する丈けの勇氣なきが故に、いや／＼ながら服従す。何ぞ其無氣力なるや。何ぞ其男らしからざるや。

抵抗に強きは服従にも強し

妄りに抵抗する莫れ。先づ己れの思慮の足らざるを顧みよ。又抵抗する者を、無暗に排斥する莫れ。其愚をさとし、其疑を氷釋せしむべし。抵抗に強き者は、又服従に強き者也。抵抗するの勇氣なきものは服従者としても頼もしからざるもの也。

千金より百金

勞せずして千金を得むよりは、辛苦して百金を得むに若かず。

智者

人を籠絡し、おだてるは智者也。籠絡せられ、おだてらるゝと知りて、黙して籠絡せられ、おだてらるゝは更に智ある者也。

女子もしくは女子に近き男子

世上の女子、もしくは女子に近き男子は、愚痴多く不平多く、洒脱なる能はず、安心立命の地を得難し。何となれば、彼等の特性として



人を羨むと人をたのむとの心に富めば也。人を羨むとは、鄰家の主人馬車にのれば、われも乗りたくなるの類也。心常に他を見て動き、其分に安んずる能はず。人をたのむとは、人によりて我を利せむと欲する也。而かも我思ふやうな人なし。口惜しく思ふこと多からざるを得ず。

天真爛漫を愛す

余輩は天真爛漫なるを愛す。然れども毫も禮節なく紳士の口にするに忍びざること公然口にして恬として耻ぢざるものを排斥す。

大事業の出来ぬ人

暑さが故に、遠く外出する能はず、家にありても、勉強する能はざるは、常人の常態也。而して斯る人に到底大事業は出来ざるべし。

妄に鋒銜を露はすべからず

元氣なる者は、其舉動も自から元氣に、其言も自から元氣也。壯に

して大也。材能を負へば、更に甚し。これも場合によりては必要なることなれど、妄りに我の念を逞しうし、一時を快くせむとて、之を人に加ふれば、人我をいやがるべく、敬して遠ざくべし。人と場所とを考へずして、忘りに鋒銜を露はすは、真に大志ありて、大器なる人は云ふべからず。

猛きが故に猛き也

獅子一たび吼ゆれば、百獸恐れ走る。これ獅子がわざと虚聲を發するに非ず。猛きは獅子の性也。従つて、其聲も自から猛からざるを得ず。猛きが故に猛き也。泣くが如き羊の聲をなす能はざる也。媚ぶるが如き猫の聲をなす能はざる也。

法螺吹の二種

法螺吹きに、二種あり。たゞ座輿を添へ、にぎやかにし、己れをえらく思はしめむとて、法螺吹くものあり。これ眞の法螺吹きにて、其



罪なきもの也。人の信用を博し、人を利用せむとて、大言壯語する者あり。これも眞の法螺吹きにて、や、罪深きもの也。共に第一種に属す。第二種の法螺吹きは、よしや自分には、それだけの力量なきも、人の爲め、社會の爲めとて、大言を發するものあり。その志は取るべし。

希望と力量

希望は大なるを妨げず。されど、實行し得らるべきものならざるべからず。又己れの力量如何を顧みざるべからず。あまり大に過ぐれば失望も亦從て大なるべし。聖を希うて賢、賢を希うて凡人との教へもあれど、伊豆一國の主たるを得れば足れりと希望せし頼朝が、終に天下を得たる例もあるにあらずや。要はたゞ希望にのみあてがれて、足下のくらくならざるに在り。

眞の大隱

東方朔曰く、「小隱は山にかくれ、大隱は市朝にかくる」と。然れども市朝なりとも隠れむとするものは、眞の大隱に非ず。眞の大隱は、市朝黄塵の中に道を説き、大義を講じ、あらゆる限りの力をつくすもの也。

世に最も痛快なる事

世に最も痛快なる事は、最も烈しく運命と戦ふに在り。大丈夫の倅自から其中にあらはるゝ也。人力の至る限りをつくして、如何ともし難き所は、運命にまかせて一笑すべし。人を咎めず、天を恨みず、死生の間自若たるは、豈に巍然たる大丈夫にあらずや。孔子が五十にして命を知ると云へるも、この點をさしたる也。

清貧の境にも恒心あり

われ我道を行はむとするも、衣食の爲めに折角の志を枉げ、面従し阿附し、卑屈となり、無氣力となり、甚しきは、操を賣るに至る。こ



れ世人の常也。唯恒産あるものは、衣食の心配なし。即ち衣食足つて禮節を知るに都合よき状態を有する也。然らば恒産なきもの竟に恒心を有する能はざるかと云ふに、古來の仁人義士、即ち恒心あるもの、多くは清貧の境遇に一生を送りたりき。

宗教

宗教は所信を堅むるに都合よきもの也。心に深く神を信じ、佛を信ずれば、勇往無前、一身を神佛にさへげて悔いず。古來宗教上の所信に基づける戦争及び種々の事業の、非常に猛烈にして、能く奇功を奏せるも、亦怪しむに足らず。

毎夜眠らむとき瞑想せよ

毎夜眠らむとき、必ず瞑想せよ、今日は果して我つとめを果したる乎と。若し一日のつとめをはたさずと自覺したらむには、決して眠るべからず。蹶然枕を蹴つて起て。起つて一日のつとめをはたせ。然る

後に眠れよ。人はこの習慣を作ることが最も肝腎也。

寸暇を偷みて勉強すべし

ちよこくと、寸暇を偷みて勉強する習慣を作らざるべからず。日に三十分か一時間、これ何等の効力なきが如くなれども、月につもれば三十時間もしくは十五時間となるべし。月又月、年又年、一生につもれば、可成り多くの時間となる也。如何に忙しき人といへども、眠る前、起くる前、食前食後、人を待つ間、人とむだばなしする間に、少し注意すれば、一時間や二時間の勉強時間はたやすく得らるべし。記せよ金を節し、利用する者は、財産家となるべし。時間を節し、利用する者は、學者となるべし。

涙の谷

涙の谷とは、言ひ得て切なる哉。このせちからき世の中に、人は泣いてばかり居らるべき者に非ず。貴賤老少、共に其身に應じて、種々



の遊戯に慰藉を求むるは、自然の勢也。而して遊戯は知らず知らず、人の品性風俗に大なる影響を及ぼす。遊戯は一種の教化の具也。

### 碁の術

碁の術他なし、二十手も三十手も先きが見えて、常に機先を制し、即ち先手を取り、眼を大局に注ぎて、一局部の勝敗に、執着せざるに在り。然るに、下手は五六手より先きは見え、常に後手を取り、往々大局を忘れて、一局部にのみ注目す。徳川家康が秀忠を叱りて、汝は碁を知らざる故、話しにならずと云ひたるは、關が原の戦の時、秀忠が叢爾たる上田城に滞りしを、大局を忘れて小局部に齷齪する下手の碁打と見做したるなるべし。

### 將碁の術

將碁は局面の變化、極めて迅速、取つたり、捨てたりする間に、非常の思慮と英斷と敏才とを要す。端の歩兵をつくは、下手將碁と知る

べし。待駒を打つは卑劣也。下手は飛車の持ち腐りをすれども、上手は能く下らぬ歩兵、桂馬の類を活かして使ふ。商業の腕前ある者とは少しの金を澤山に廻はしてつかふ者の謂也。日本の財産家は、多くは飛車の持腐りの類なるべし。

### 爲す前に思慮せよ

爲す前に思慮せよ。深く思慮して然る後に、事を斷行せよ。然るに通常の人、思慮せずして事をなし、事を爲したる後に、始めて思慮す。過失多き所以也。後悔多き所以也。

### 嘲罵

天才者、もしくは自信ある者は、能く嘲罵す。其眼識に、他の凡人の爲す所、あまり馬鹿げて見ゆれば也。其他、社會の爲め、風紀の爲め、文學の爲め、嘲罵せざるを得ざることあり。嘲罵必ずしも惡徳ならず。唯だ嘲罵すべき箇處を明かに指し、證據をたしかに捉へて、然



る後、公然名のり出で、嘲罵すべし。背後に於てせずして、面前に於てすべし。これ正當の嘲罵也。

罵るものを愛す

余輩は罵るものを愛す。然れども一身の小不平、もしくは嫉妬より起る罵詈を排斥す。

辯舌

辯は明晰なるを尙ぶ。言は簡明なるを尙ぶ。而して人は社交の動物なれば、談話に長ずるを要す。或は快濶に、或は洒落に、面白く、可笑く、罪なく、いやみなく、而かも品性を墮すまでに卑俗ならず、話柄豊高、趣味津津たるは、交際場裡缺くべからざる一要件也。

素養

杉の大本、梢は雲を凌ぐと共に、根は九泉に達す。世に大なる榮譽あるものは、必ず其榮譽を致す所以の素養あるもの也。唯梢の高さを

うらやんで、根の蔓延を怠らば、微風にだも倒れむ。安んぞ能く大風に堪へんや。他の偉人の榮譽をうらやんで、素養を怠らば、一時或は虚名を得べけれども、金箔の如く忽ちはげ去るべし。

文章は人物の反射

文章は、人物の反射也。文章の氣あるを欲せば、其人物も亦氣なかるべからず。氣ある人にして、其文も亦自から氣あるべき也。活氣なき人が、如何に筆をまはし、文句を飾ればとて、氣ある文章が作らるべきものにあらず。文章を作らむにも、先づ人物の修養を要する也。

人は教育家の覺悟なかるべからず

職業の如何を問はず、人は半面に於て、教育家の覺悟なかるべからず。教育あるは、人が他の動物と異なる所以也。人生は一大連環也。吾人の一生は、其中の一環也。吾人既に前人の薫化を受けて、今日の開化を有し、以て前環に連る。吾人は之を後人に傳へて、以てつゞき



來れる環に連らしめざるべからず。

眞の批評

唯正理を見て人を見ず。義の爲めにして、一身の爲めにせず。これ眞の批評也。覆面にて、箇所を指點せずして漫罵するは、わが取らざる所也。而して賞揚は人を慰藉し、獎勵し、鼓舞す。

迷悟悟迷

人と生れた以上は、我れ一人の世界に非ず、萬人の社會なりと云ふことだけを知らざるべからず。私慾を逞しうせむが爲めに萬人の血を流すは、あまり得手勝手なる話し也。功名富貴など云ふことは、何てもなし。何てもなしとさとりてもまた何てもなし。迷うて悟り悟りて迷ふ中に、人生は楽しく送らるべし。

馬鹿正直なる人

馬鹿正直なる人は、己れの心にひきくらべて、人は善良なるもの也

たのもしきものなりと、はじめより人を信じ、人を頼んでかゝる故、世に出て、偽善者に接し、薄情なる行爲を見て、腹をたてる也。腹をたてるの餘り、失望して厭世の念を起す也。さりとは餘り馬鹿々々しからずや。

馬鹿正直なる人を排斥す

余輩は正直なる人を愛す。然れども一步下りて馬鹿正直となれるものを排斥す。

喰へぬ人

貴様は馬鹿だと眞正面から怒鳴りつける人は、馬鹿正直にして與みし易き人也。君はえらいよと、追従らしくなくもちかける人は、中々喰へぬ人也。誰でもうぬぼれ根性は免れぬものなるが、うかと其口車にのり、おだてられて得意になり、本氣になりて、其人の爲めに働かば、大に馬鹿を見るべし。いよく用がなくなりたる時、さらばと、お拂



箱にされ、臍をかむとも、また及ばざる也。

近火見舞を謝するきまり文句

『混雑中、御尊名聞き洩しも有之べければ、紙上にて御禮申す』とは、常に新聞の廣告に見ゆる所にして、近火見舞を謝するきまり文句也。誰だか知らぬが見舞ひに来てくれたから禮を云ふとは、餘り人を馬鹿にしたる言ひ方也。自分の名を聞きもらされて、先方に知れずば、新聞の廣告にあてどもない禮を云はれたとて、見舞ひし人は、さッぱり有難からざるべし。

新しき名札舊き名札

一門内に三四軒ある處の門柱に、新に移轉せし人、自分の名札を在來住へる人の名札の上のうちつけしに、在來住へる人は、自分の名札をはづして、新しき札の上のうちつけたり。數日過ぎて、また其門を過ぎしに、こたびは、新しき札更に上りて、舊き札の上になり居たりき。

八方美人

所謂八方美人となりて、斷乎たる處置をなす能はず、人の機嫌をとるにつかれて、主張なく、主義なき者は、股肱の臣とするに足らず、益友とするに足らず。

狷介孤立

氣骨のみありて、圓滑ならずんば、人の上になつ能はず、又人の下にたつ能はず、人と衝突し、蠻觸し、到底共同する能はず、狷介孤立となるべし。これ論客としては可也、詩人としては可也。然れども社會に事業をなさむとするには適せず。

外柔内剛

要するに、人は桃の實の如く、外柔にして内剛なるべし。栗の實の如く、外剛にして内柔なるべからず。即ち氣骨をつゝむに、幾重の圓滑を以てすべき也。



我面前にて我を罵るもの  
我面前にて我を罵るものは、決して悪き者に非ず。必ず硬骨にして頼もしき人也。我面前にて追従たらしく言ふものは、真にはむるものに非ず。必ずかげにて罵る人也。

長所は短所

力士は走れず。走る車夫は角力とるに腰よわし。常識の最も圓滿に發達せるものは、深く學理を究むるに適せず。細き事に氣が利き過ぐるもの、大なる處に目がつかず。長所は即ち短所也。あらゆる點に於て、かなりの優等點を得るよりも、多くの點は、合格點内外にありて、一點のみ非凡なるを要す。かゝる人が實際よく事業をなすもの也。

座右の銘

自から奉ずること質素なるべし。人を遇すること厚かるべし。氣は壯なるべし。心は細かなるべし。事を斷ずるには、冷やかなるべし。

一旦斷じて事に當りては、あくまでも熱すべし。

人は師とすべし

人は師とすべし。善惡とも鑑とすべし。人を羨むは愚也。人をたよるは痴也。人と合同するは、世益をなさむが爲也。然るに世人は我が一身の利益をはからむとて合同す。衝突、内訌、怨恨、愚痴絶えざる也。

わが好きは

わが好きは、雨、海棠、尾花多き秋の野、蘆花白き川邊、杉の木立深き處、深夜五位鷺の啼わたりたる、天井の高き、疊の新しき、山間の月、浪あらし海邊、瀧、夏の夜、旅行、讀書、山上の眺望、小犬、三四歳の幼兒、氣前よき男、沈勇ある人、強情なる男、沈痛悲涼の趣ある音樂、繪畫、及び詩文、莊子の文、李白の詩、碁、角力、清少納言、靜御前、鎮西八郎、旭將軍、文覺上人、小楠公、吉川元春、山中



鹿之助、天野屋利兵衛、明治の人にては、山地將軍。

わが嫌ひは

わが嫌ひは、蚊、蠅、猫、風、塵、さざな男、氣取る男、臆病者、えらがる男、利口ぶる男、にやけ男、理窟ずきの人、氣概のなき男、愚痴をこぼす男、酔うて管まく男、義理知らぬ人、おべつかもの、釣魚、ランプのうすぐらき。

これを戒むる色にあり

少年の時、これを戒しむるは色に在りとは、流石に抜からぬ聖人の言なり。何人も二十歳前後は、春情の發動する期間にして一生中もつとも危険なる時代なり。年少の士もつとも之を戒しめ謹しまさるべからず。一朝の出來心の爲めに一生をあやまり、後悔臍をかむとも及ばざるべし。されば、眞宗皇帝も、その勸學文に『娶妻不憂無良媒、書中有女顔如玉』と戒しめ給へり。唯苦學して業就り名遂げなば、

美人は求めずして、自ら得らるべしとの意なり。

食色

十歳より二十歳までの間に身を誤りやすきものは食慾也。食をつゝしむを要す。二十歳より三十歳までの間に身をあまりやすきものは色也。色の爲めに志を損せざらむことを要す。

外貌に欺かる莫れ

上に媚ぶるものは必ず下に威張り、表に追従言ふものは、必ずかげに嘲罵す。ゆめ外貌にあざむかるゝこと莫れ。

隱遁者

人には、長所あると共に、必ず短所あるもの也。もし短所のみを見れば、人はみないやらしさものゝみなるべし。世の隱遁者は、人の短所社會の缺點のみを見たるもの也。然らずんば、一身の境遇に愚痴をこぼして、すねたるもの也。



古の偉人

萬事、伴侶若しくは知己を求むるは、人間自然の至情也。而してこれ順境に在つては、希望を興へ、逆境に在つては、憂を分つもの也。人は之が爲めに勇み、また慰藉せらる。況んや其非凡にして聲譽大なる者をや。此伴侶知己は、生きたる人にも求めたけれど、容易に得難し。且つ人の所信に力あるものは、古の偉人也。古の偉人は、實に崇拜者の眼中には神佛也。

書物の選擇と師の必要

如何なる書物を讀みても、多少の智識は得らるゝものなれど、書物の良否如何によりて、其得る智識に多少あり。甚しきは害になるものなしとせず。是に於て、書物の選擇の必要を感ずる也。

書物の選擇、必要なれども、學問淺き少年の身にしては、自から之を選擇するに由なし。これ師の必要ある所以也。師は多く書物を讀め

り、其良否を知れり。學生たるもの、就いて之を問はざるべからず。問ふて、向ふ所を知らざるべからず。

歴史を學ぶの第一義

歴史を學ぶの要は、徒らに昔の事のみを知るの謂にあらず。眼前日常の歴史を知らざるべからず。古今内外の歴史を知り、人事に通じて、將來の事業に資す。これ歴史を學ぶの第一義にあらずや。而して既往の人事は、歴史の教授あり、書物も多けれど、眼前の出來事は、新聞紙に據つて之を知らざるを得ず。學生たるもの、必ず日々新聞を讀んで、學校に學べる歴史との連絡を圖らざるべからず。

經驗より得たる智識

書物より得たる智識は、ひろく且つ高けれども、眞にその人と融合し難し。經驗より得たる智識は、よしやせまく且つ低しとも、確實也。人はなるべく多く經驗せざるべからず。



## すべて規則正しくせよ

願くは順序を追へ。日々之を學べ。牛の歩みのおそくとも、たゆまずば、千里に達するを得べし。學問の法は、馬の如く疾走するを要せざる也。成巧をいそぐなかれ、成功をいそがば、心も足もそらになりて、或はつまづくことあらむ。よしや、つまづかずとも、路の左右にあるものを觀察するに由なからむ。高きに志して、近く思へ。飲食に運動に、勉強に、遊戯に、すべて規則正しくせよ。毎日時間を定めて勉強し、休息せば、病などのつけ込む隙間なき也。

## 生活の方便

仰げよ。大空あり、月あり、星あり。理想の光、來り照さむ。たゞ生活する方便として、俯して食はさべからず。

## 競争の世

競争の世なる哉。人は人と競争し、家は家と競争し、國は國と競争

す。運動は競争のあるものが面白く、遊戯の大部分は、競争にもとづけるもの也。人は競争せざらむと欲するも、競争せずにするは能はず。されば、横には國と國と競争せよ。縦には古の偉人と競争せよ。今の世の人才とやらと、どんぐりの脊くらべして、自から喜び、東洋の英國を以て自から甘んずるやうにては、競争心も亦小なる哉。

## 浮世の快樂

貧賤の味を知れるものにして、はじめて浮世の快樂を知るべし。富貴の家へのらくする者はあづからず。

## 書を読むより世を読む

慾望大に、理想高く、自信つよくして、精勵、業を修め、事に當れば、邪念のささす餘地なし。かくて、智まし、世故に老ゆれば、自から人生がわかり、社會がわかる也。書をよみてのみ道がさとらるべきものに非ず。世を読む方が、書を読むよりも、更によく道をさとるを



得べし。かくて得たる道德上の觀念は、書を読み得たるものよりも強し。白首、經をさばむる迂儒よりも、老農大工の親方などに、却つてわけのわかつた人がある也。

労働の快樂

逸居の苦痛の裡面は、労働の快樂也。

雨のふる日も、風のふく日も、一日も休止せず、朝早くより起きて數里の路をあるさまはり、日くるゝまで、家に歸るを得ざる少年よ。卿等の境遇を苦しと云ふこと莫れ。卿等は世に幸福なる人也。太牢の味を粗食にて感じ得る人也。夜の夢に神をやとし得る人也。

人間の最も發達せし所以

鳥の翼あらず、魚のひれあらず、牛の角あらず、象の牙あらず、羊の毛あらず。天賦のうすきは、即ち人間の最も發達せし所以也。

記 恩

人、道德的動物の本意を得むには、先づ恩を記することより始めざるべからず。半夜瞑目して、靜思せよ。わが今日まで生ひたち、學問し、智慧を得、二豎の難を免れ、生命をも、名譽をも、財産をも安全にたもち、悠々として生活するを得るは、ひとり我天賦によるのみならず、我勉強によるのみならず、父兄の恩也、朋友の恩也、師の恩也君の恩也、先輩の恩也、社會の恩也、國家の恩也、國民の父祖の恩也これらの恩を知り、知りて肝に銘し、肝に銘して身を行はば、徳性自から備はらむ。

忘 恩

恩を忘るゝは、大なる不徳也。されど、たゞ折り目きり目に往いて機嫌を伺ひ物品を贈るを以て、恩を酬い得たりと思ふは誤れり。

恩を與ふるを好むは、美德也。恩を賣るは、惡徳也。恩の報酬を望むは、惡とまでにあらねど、賤むべし。



社會の恩

手腕家、獨力を奮うて、巨萬の財を得たる者、動もすれば曰く、これ我が力にて得たるもの也。他の恩に非ず。われ之を以てわが勝手なる事をして可也と。されど、記せよ。これひとり無人島に生長して、無人島にて得たるに非ず、社會に於て得たる也。

名か實か

名を取るべき乎、實を取るべき乎。

源頼朝、征夷大將軍となり、幕府を創めたり。こは幕府を創めたる名を取れる也。大江廣元、王佐の才を以て、往いて頼朝の帷幄に參して、幕府の創立を計畫せり。これ幕府を創めたるの實ある也。頼朝とならむ乎、廣元とららむ乎。

活歴史を乾坤の間に印すべし

大丈夫たゞ六尺の身を以て、活歴史を乾坤の間に印すべし。史家之

を傳ふるも可也、傳へざるも可也。

情性

疾行する車の上に立つ。車とまる。からだ前に倒る。これ物質上の情性也。かゝる情性は心の上にも存す。

昨日遊べば、今日も遊びたくなり、明日も明後日もまた遊びたくなりて、その極まる所を知らず。世の懶惰者とは、この域に彷徨する者の謂也。思ひ切つて、心懶の性を制するものにして、よく勉強し、よく成功す。

政治家となるべき要素

徳のみにて政治家になれず。智のみにて政治家になれず。蠻勇のみにて政治家になれず。政治家となるべき要素は、人を引着する力に富むこと也。さればとて、八方美人の謂には非ず。

ほしきもの



十歳前後の人曰く、菓子。二十歳前後の人曰く、美しき妻。三十歳以上の人曰く、金。

清き川濁れる川

清き川は、大船を容るゝ能はず。大船を入れ得る川は、必らず濁れり。

穴にもぐり込む鰻

穴にもぐり込む鰻、必ずしも意氣地なしに非ず。首をきられても、肉なほ躍る。びんく跳ねまはるものは、却つて案外にもろきもの也。怒るものは、與し易し。笑ふ者が、けんのも也。

有用の材

曲りくねつたる樹木は、人の注目を惹きて、人に愛玩せらるゝも、有用の材とはならず。有用の材となるものは、すなほに、眞直に延びて、大きくなりたる樹也。

奇巧は飽きやすし

奇巧は、一時人目を驚かしむるも、あきが來やすし。平凡なるが如くにして、實に奇なるものが、長持ちがするもの也。

三不可語

めくらに色を語るべからず。つんぼに音を語るべからず。小人に君子の樂を語るべからず。

屏風は直立す

屏風は、曲らざれば立たずとは、横に屈折する事なるべし。屏風その物は、直にして立てる也。まがらば、必ず倒れむ。

きたなき池沼の産

蓮花や、蘆花や、きたなき池沼の産する所也。清溪の有に非ず。

眼孔紙背に徹すべし

讀書の際、難解の文に逢はゞ、工夫に工夫を重ね、思慮を積み、言外



の意まで悟り、眼孔紙背に徹することをつとむべし。常に書物の上のみならず、事々物々、かならず其原因結果を明かにすべし。かくて理解力、判断力は自から養はるべし。

妄りに急ぐこと勿れ

語を寄す、浮世に旅せむとする少年の士、みだりにいそぐこと勿れ。急がば躓くべし、且つ早くつかるべし。左右の誘惑物に目をとぢよ。目を開かば、人情の弱點、覺えず岐路に迷ひこむべし。唯前途に理想の到着地を定めよ。

生存の意義あり

其人の存亡、世界の大勢に關するに至れば、此上もなきことなれどせめては一國に關したきもの也。一國のあらゆる社會ならずとも、せめて一社會だけには關したきもの也。學者となりて學問社會に關し、商人となりて商業社會に關するに至らば、その人は始めて生存の意義

を解するものと云ふべし。必ずしも名譽心と云はず。又野心と云はず。生きて社會に關し、死して痕跡を千載に残すは、むしろ社會に生きたるもの、義務也。無爲にして終るは、社會に借金してかへさるもの也。

理想は理想とせよ

理想は理想として、各自之に向つて進まむことをつとむべし。妄りに之を現在の人物、諸事物に求むるは、思はざるも亦甚しといふべし。之を求めて得ず、失望し、落膽し、慨歎し、人を恨み、世を恨み、狷介にして孤立して、所謂不平家となり、社會の實業、實益と遠ざかるは、愚も亦甚しからずや。

高木風に疾まる

『林の中でも高い木は、風が枝をば折るぞとよ』おのれ一人理想に近づきて、社會の水平線上に卓立すれば迫害四邊より至る。なほ海中に



立てる巨巖の、怒濤に包まるゝが如し。此間に立ちて、千苦萬難に堪へ、巍然として、益理想に近づかむとするは、豈に人生の大快事にあらずや。

今少し氣力なかるべからず

某生あり。書を余に寄せて曰く、われ職を東京に求めて勉學せむとて上京せり。往いて先生に請はむとて門前に至りしも、心臆して入る能はざりき。書を以て意を通ず。何時往かば、面會を許さるべきかと。われ卿の志を憐む。されど、某生よ。苟くも男子たる者が門に來りて入る能はざる迄に元氣なきやうにては、虎狼横行する此活社會に濶歩すること能はざるべし。社會に活動せむとせば、今少し氣力なかるべからず。

日本人は餘りに現實的也

諺に曰く『來年の事を言ふと鬼が笑ふ』と。噫、日本人は何ぞ現實

的なるの甚しきや。現實的なるが故に、小成に甘んずる也、老朽し易き也、若隱居多き也。眼前の利害に拘束せられて、身後百年の大計を立つるものなき也。これ決して國家の慶事に非ず。

人類の快樂と動物の快樂

もし人類の快樂と動物の快樂との異なる點を求むれば、動物は現在の也。毫も希望なく、理想なし。人類にして、はじめて理想希望の快樂を享受す。人類と生れてこの快樂を享受する能はざるものは、動物と伍を同じうする者と云ふべし。

肉體は死するも精神は死せず

一事成れば、更に一事を起さむとし、百萬圓を得れば、更に千萬圓を得んとし、希望絶えず、活動益大なるこそ、人の人たる所以なれ。かくて一生勞苦して倦まず。他より見れば、苦しきが如きも、其本人にありては、浮世に之より以上の快樂はなき也。かゝる人に在りては



死するも希望盡さず。否、其肉體は死するも、其精神は死せざる也。

最も價値ある最期

事業の成功の見込み十分なるに、其成功を見ずして死する者あれば人惜んで曰く、その出来上るまで活かして置きたきもの也と。これ普通の人情也。然れども一考せよ。かゝる人の一死こそ最も價値ある最期にあらずや。一匹夫より起りて、海上王と呼ばれたる岩崎彌太郎、死に臨んで曰く『東洋の男兒、志業未だ半を成さず』と。

勲章は兒女のかんざし

余輩はもとより功名富貴を嫌ふものに非ず。然れども、虚爵虚位、人の價値に於て何かあらむや。胸にかくる勲章の多さを誇るは、兒女がかんざしを多くさして喜ぶに類せずや。

鶏口となるも牛後とならず

伴食大臣となるは易し。民間にて大事業をなすは難し。然るに世人

彼を尊んで、此を羨まざるは何故ぞ。男子は由來裸百貫、到る處我手腕を伸すに足る。寧ろ鶏口となるも、牛後とならず。豈に區々として官の椅子を争はむや。

たしかなる人

たしかなる人は、即ちたのもしき人也。かゝる人は、朋友としてたのもしく、相談相手としてたのもしく、手下としてたのもしく、首領としてたのもしく、安心して事を打ちあけることも出来れば、金を打任かすことも出来る也。實に世間日常、なくてはならぬ人物也。斯る人、社會に多ければ、社會の事業は擧る也。論語に、『以て百里の命を寄すべく、以て六尺の孤を托すべし』とあるは、此類の人也。

歳寒くして常磐木あらはる

歳寒くして、常磐木はじめてあらはる。好運に乗ずれば、小人跋扈し、豎子鳴張す。逆境に陥りてこそ、人物の大小、氣品の高下は見ゆ



れ。富貴の家に生れてこそつかぬは、あたり前の事也。貧窶の家にそ  
だち、始終逆境に處しても、なほこそつかぬは、その人品眞に高き也。

お坊つちやん育ち

富家に、甘き父母の下に、温かき家庭に生ちたる人は、どことなく  
鷹揚にして無邪氣なる所あり、僻み根性なく、こそつかず。これ其長  
所也。されど、思ひやりなく、わけが分らず、お察しがなく、意志弱  
く、艱難に逢へば、忽ち挫折す。これ其短所也。

苦學したる人

貧賤の中に苦學したる人は、意志つよく、思ひやりあり。これ其長  
所也。されど疑ふかく、僻み根性ありて、こそつく。これ其短所也。  
この短所あるは、平凡なる人也。少し常人より上に出でたる人は、毫  
もかゝる短所なかるべし。

人を玉成する所以

富家の子弟を羨むこと莫れ。學資の乏しきを嘆ずること莫れ。少年  
時代の艱苦は、人を玉成する所以也。

丈夫悟入の境

人や、もすれば曰く、大石良雄、陽はつて遊蕩せし間に病死せば如  
何。永く不忠の名を残すにあらずやと。然らむ時は即ち天也、命也、  
致し方なしとあきらむるこそ男なれ。よしや浮世に不忠の名を残すと  
も、我良心に對して疚しからずんば、即ち可也。未練にして愚痴をこ  
ぼし、ひたすらに世のうはさを氣にするは、婦女子の事也。丈夫たら  
む者は、能く悟入して、此域に達せざるべからず。

われ我を知る

われは自から信じて、道の爲めにつくす。世人われを馬と言は、馬  
と言はしめよ。鹿と言は、鹿と云はしめよ。多數の愚人は、われを知  
らずとも、識者は知るべし。現代の識者も知らずとも、後世の識者は



知るべし。後世の識者も知らずとも、神は知るべし。神も知らずともわれ我を知る。豈に未練を言はむや、愚痴をこぼさんや。世上の毀譽褒貶、われに於て何かあらむや。

樂み自から其中に在り

向上心なきものは、溜れる水の如し。毫も生氣なくして腐敗する也。低きにありて、高きを忘れず、希望常に胸に充ち、活氣身に溢るべし。かくて一生の中、其志を果す能はざるも、樂自から其中に在り。社會隨て進歩する也。

足ることを知る

如何に向上心あればとて、あらゆる欲望を悉く逞しうすべきに非ず。公共の爲めには、私慾を抑へざるべからず。精神的欲望はあくまでも盛なるべし。肉體的、物質的欲望は、之を抑へざるべからず。事によりては、身分相應といふことあり。又人力の如何ともすべからざる所

あり。達人は從容として運命に甘んず。足るを知るとは即ち是也。

學問と性情

學者とならむものは、頭腦明確にして、思索力に富める人ならざるべからず。概して、情に乏しき人にて可也。されど、學問の種類によりては、冷かなる頭一方の人にては不可也。たとへば、理學の如き、自然の現象を研究する人にありては、情冷かなるも可なれども、哲學、美學、史學、心理學、倫理學など、多く人事に關する學問を研究する者は、多少同情に富めるものならざるべからず。冷かなる人は、思ひやりなく、偏する所あるを免れず。詩人、文人に至りては、最も情に富める人ならざるべからず。

事業家

事業家にいたりては、最も意志の強きを要す。智の明かならざるべからざるは、言ふまでもなけれども、智力のみにて、事業が成るべき



ものに非ず。勇往猛進、攻撃を恐れず、障害に屈せず、志せる所は、あくまでも之を貫かんとし、區々たる情實に拘はらず、八面玲瓏の嬌態を學ばず、義の爲めには金銀よりもかたく、敵には意地悪く當り、能く斷行して顧慮せざるの概なかる可らず。かゝる人は味方にたのもしく思はるゝと共に、多少敵あるべし。敵として弱きものは、味方としてもたのもしからず。敵多くして、たま／＼其意志のつよく、手腕の大なるを見る。智のみ明かなる人は、顧問たるに適す。實行者には適せざる也。情のみ強き人は、詩人、文人に適す。實行者には適せざる也。

空威張付元氣を排斥す

余輩は活氣あるものを愛す。然れどもうはべばかりの空威張り、付け元氣を排斥す。

事業の人たる要素

事業の人たらしむとするには勤勉なるを要す。規則正しく事務に精出して、如何に繁忙なるも倦まず、撓まず、骨身を惜しまず立ちたらくを謂ふ也。心身の安逸を貪り、空想にふけり、烟草と親しみ、空談を好み、よろづ腰重く、姑息に流れ、今日爲すべき事も明日に譲るやうでは、事務自から滯滞して、事業は擧らざる也。

同

又果斷なるを要す。頭腦明確にして、判斷力に富み、事の利害得失を識別し、機に臨み、變に應じて斷行して惑はざるを謂ふ也。機會は汽車の如し。今來るかと思へば、忽ち去つて其跡を見ず。優柔不斷、徒らに恐れ、徒らに惑ひ、狐疑し、躊躇し、思ひ切つて斷行する能はざるやうにては、折角好機會に遇ふも、その機會を捉ふることも能はずして、事業は擧らざる也。

同



又常識の完全なるを要す。ひろく世事に通じ、よく物の道理を辨へ是非に明かに、事に處して其當を得るを謂ふ也。常識不十分なれば迂濶となり、偏窟となり、判断を誤り、應用を誤りて、事業は擧らざる也。

同

又機敏なるを要す。よしや一を聞いて十を知るまでには至らずともよろづ悟り早く、目先さとく、常によく機先を制するを謂ふ也。遲鈍なれば、事間に合はず、萬事人後に落ちて、事業は擧らざる也。

同

又膽力あるを要す。おめず、臆せず、びくつかず、大事に臨んで駭かず、危急の際に従容自若たる餘裕あるの謂也。氣小に、臆病に、恐怖心常に胸にみつるやうにては、氣象萎微して、到底大事を斷ずる能はず、卑屈となり、因循となり、引込思案のみして、事業は擧らざる也。

同

又質素なるを要す。よく慾を抑へて、自から奉ずること薄く、よろづ贅澤を慎み、費用を節するを謂ふ也。奢侈にふけりては、取れば取る程金足らず、終には苦しまぎれに不正手段を行ふに至るべく、弊害百出して、事業は擧らざる也。

同

又意志の強きを要す。一度決心したることは飽くまでも斷行し、區區たる情實に拘束せられざるを謂ふ也。情にもろく、氣の毒がる性質に富み、たゞ人をいたはり過ぎて、毫も冷靜なる所なく、障害にへこみ、失敗に屈するやうにては、到底競争に堪へずして、事業は擧らざる也。

所 信

仁慈義侠、君に盡し、國に盡し、社會に盡し、人道の爲めに盡すべし



るべからざることは、人皆之を知れども、一旦死地に臨みては忽ち躊躇し、利害得喪の際に忽ち節を變ずるは、平生の所信堅からざるに由る也。苟も所信だに堅ければ、萬死且つ辭せず。財産、生命、名譽、妻子に戀々たらず。白刃頭上に臨むも、泰山後に崩るゝも、毫も動かざる也。

大膽にして小心

人の世に立たむには、びく／＼せずして、而かも用心ぶかきを要す。譬へば大船に乗りたる心持ちにて、兼ねて芥子の花もつ覺悟なかるべからず。

智勇兼備

膽小にして心小ならざる者は、毫も取柄のなき人也。膽小なるも心小ならば、なほ事務家となるを得べし。心小ならざるも膽大ならば、なほ壯士もしくは俠客となるを得べし。英雄豪傑の士は、必ず膽大に

して、心小なる者也。

心小なれば、智の働を鋭くし、膽大なれば勇の働を強くす。智勇兼備とは、膽と心との修養至れるの謂也。

快樂は心にあり

快樂とは、畢竟するに心の満足也。たとひ金殿玉樓にて太牢の御馳走にあづかりたればとて、主人に氣兼し、窮屈な思ひして飲める酒、いかてか快く酔を買ひ得べき。それよりはきたなくとも我が家、悪くとも我錢もて買ひたる酒、一皿のひやゝつこにて氣まゝに飲む方が遙に愉快也、酔が廻る也。快樂は心に在り、物にあらず。

志士仁人の樂

私利私慾を逞うして、以て快とするは、俗人の常也。而してこれ動物の域を去ること、なほ遠からざるもの也。かゝる人が、彼の我財を散し、我力をつくして、他の爲めに周旋奔走し、他の喜ぶを見て自か



ら喜ぶ者を見れば、馬鹿げたること、思ふなるべし。然れども此の如き仁人は、其中に無上の快樂ある也。一枝の安に甘ずるみそさしいは大鵬の志を知るべくもあらず。世人の俗人輩が、志士仁人の樂を解せむには、一段の修養を要す。

讀書の樂

伴侶ありて始めて得るの快樂は、常に得べからず。又人に迷惑をかくることあり。碁、將碁、玉奕などの如し。讀書に至りては、いついかなる處にても、獨り之を樂しむを得べし。其の樂いよく窮めて、いよく盡さず。嗚呼人、書を讀みて知識を養ひ、情を養ひ出で、社會につくし、入りてまた書を友とし、書に慰藉を求むれば、其の人の一生如何に樂しかるべき。夜雨一燈、しづかに書に對し、心澄み、氣昂りて、一身書と共に融化して、われ我れを忘るゝことあり。知らず世上の名奔利走の徒、此樂を解せりや否や。

修業の秘訣

修業の秘訣は他なし。唯他の妄念を去りつくして、心を其事にのみ用ゐ、即ち夢中になりて、注意力を盛にするにあるのみ。面白しと思はざれば熱中せずして、心や、もすれば他に散り、いろくの事をくよく思へば、心茲に專ならず。斯の如くにして、五六時勉強せむよりも、一意専心に二三時勉強する方が、効果遙に多かるべし。

憫れむべき者

世に憫れむべきは、未練なる男、臆病者、愚痴をこぼす男、一身の利害以外に天地人生あるを知らざるもの、人を恃みて人の顔色を見て喜憂する者。

未練

未練とは、悟らざるもの、謂也。世の中は、成るより外には成らず。成敗は人に在り、運は天に在り。人力の在らむ限りを盡したる以上は、



運を天に任すの外なし。事成らざるも人を咎めず。爲めに死を致すも天を恨みず。死生の外に超脱して、自若として運命と戦ふ。安んぞ未練を言はむや。

臆病

臆病とは、矢張り悟らずして、膽力のなき者の謂也。既に死を視ること歸るが如くならば、また何の恐るゝ所あらむや。よしや、幾分死を惜しむの念ありとも、己れに恃む所あらば、さまで恐るゝ所なかるべし。こゝに最も見苦しきは、平生は大言を吐きて、骨あり、膽あるが如く見せかくる男が、いよゝゝ危き場合、生死の巷に臨みて腰を抜かし、醜態を演出すること也。

苦痛

十歳前後の人曰く、親の小言。二十歳前後の人曰く、試験。三十歳以上の人曰く、生計。

愚痴

愚痴は、未練とは兄弟分なり。思ひあきらむること能はずして、くよゝゝとかへらぬ繰言を云こと也。これも悟らざるの致す所にして、修養の足らざるに坐す。婦女子に多く之を見る。男にても女子に近きものに之を見る也。

私情私慾の人

一身の利害以外に天地人生あるを知らざるものは、私情私慾の念のみ強くして、同情なきもの也。公德心なきもの也。社會人生の何たるを解せざるもの也。人われにやさしくすれば、何よりもうれしく思ひわれに薄情なれば、忽ち世の中を地獄のやうに思ひ、一喜一憂、みな他人が己れに對する所作による。天高く地厚きも、自から求めて踟躕する也。

人の顔色を見て喜憂する者



人を持みて人の顔色を見て喜憂する者とは、毫も己れに恃む所なく  
獨立獨歩する氣概なき也。苟くも獨立自尊、己れに足つて、他に待つ  
所なくんば、何ぞ人を持まひや。既に人を持まらずんば、何ぞ人の顔色  
を見て喜憂せむや。人間も人の顔に喜憂するやうになりては、情けな  
きの極點也。たとひ爲めに富貴となるとも、むしろ餓死せむに若かさ  
る也。

武士は食はねど高楊枝

一瓢の飲、一簞の食、陋巷に窮居せし顔回の一生、果して苦しかりし  
乎。之を苦しと思ふは、俗人の俗解也。俗人は現實に生活す。たゞ現  
實の快樂を得れば、則ち満足する也。毫も理想の生活を解せず、美酒  
をのみ、佳肴を食ひて、はじめて人生の甘さを知る。武士は食はねど  
高楊枝の味は、到底彼等のよく了解し得る所にあらざる也。

人に長たるの要素

人に長たる者は、人を統御するの才なかるべからず。人を服するに  
足るの徳なかるべからず。好む所に偏私すべからず。人を見るの明か  
なるべからず。人を容るゝの量なかるべからず。膽力なかるべからず。  
餘り細かき事に氣がつき過ぎて、こせくすべからず。心に聰明にし  
て、表面には多少ぼんやりしたる所なかるべからず。馬鹿にさるゝま  
でに、優柔不斷なるべからず。大なるしめくゝり、莫かるべからず。  
時に威を示さるべからず。あらゆる事にまで、我手腕を揮はむとす  
べからず。よく部下の才力を識別して、然る後、之に打ちまかせて、  
其人をして責任を帯ばしめざるべからず。

士は己れを知る者の爲に死す

古人も、士は己れを知る者の爲めに死すと云へり。誰れとて、も、信任  
せられて責任を負はせらるれば、必死になりてはたらく者也。人に長  
たる者は、此點に注意せざるべからず。而かも信任する前に、其人と



なりの如何を熟知せざるべからず。

最も大なる事業をなす者

個人の方には、限りあり。世に最も大なる事業なす者とは、最も多く人の力を利用する者の謂也。

王公將相種あらず

王公將相、もと種あるに非らず。運命非にして地位を得ざるが爲めに、空しく蓬蒿に老ゆる無名の豪傑もあるべし。さまでえらからずとも、十人並みの智慧ある人ならば、漸次地位高まりて、相となり、將となるもそれ相應に役はつとまるもの也。泥んや、人にすぐれたるものをや。秀吉も草履取りの時代ありき。ナポレオンも陸軍少尉の時代ありき。もし、その地位に甘んじ目から軽んじ、自ら侮りしならむには、いかてか後來の大事業あらむや。

自惚と力量の一致

古來英雄豪傑の士、もしくは一藝一能にすぐれたる士は、必らずや自から矜持して、妄りに人に下らず。管に人のみならず、鳥の中にも鷺を見よ。鷹を見よ。獸の中にも虎を見よ、獅子を見よ。張目他を見下し、昂然として自から高く標置す。これ皆自信あるの致す所也。而して修養ある偉人に至りては、之れを心に收めて、形にあらはさず妄りに威張らず、えらがらざれども、凜然として、自から侵すべからざるものあり。これ自惚と力量とよく一致せる也。

虎たらずとも豺たり

力量と一致せざる自惚は傍痛きものなれど、一致すれば壯觀也。其一致するは、多少天資の如何にもよれど、多くは飽くまでも自惚ありて、之につれて黽勉うまざるに基く。かれば、よしや自惚だけには成功せずとも、必ずや凡流以上に超絶す。虎たらずとも、なほ豺たり。犬や豚の如く碌々たるものにあらざる也。



## 我主義我黨派

主義あり、又黨派あり、我主義我黨派に忠實にしては、敵に大打撃を加へざるを得ず。かくて味方は大に賞嘆すべけれども、敵は恨み且つ憎まざるを得ざるべし。公平なる裁判官、一方を直とし、一方を曲とするも、曲とせられたるものは、なほ恨む。況んや主義と主義、黨派と黨派との争ひに於てをや。かかる憎悪は、多ければ多き程其人の力量の非凡なるを語るもの也、我主義、我黨派に功勞あるを證するもの也。他の憎悪何かあらむや。

## 韓生の一死

有爲の士、請ふ覺悟せよ。思ひ切つて言ひ、思ひ切つて爲し、而して、其言ふ所、其爲す所非凡ならば、必ず敵あらむ、憎悪あらむ、又不慮の災難あらむ。憎悪を怖る、者は口を緘せよ。蝸牛の如く退縮せよ。項羽の面前、項羽を沐猴冠と罵りて煮られし韓生の一死、何ぞそ

れ花々しきや。

## 言行不一致

抱負や、理想や、希望や、到底現實と一致すべきものに非ず。もし一致すれば、これ抱負なき也、理想なき也、希望なき也。その人は精神的に死亡せる也。換言すれば、抱負に對するの言は、到底行と相伴はざるもの也。むしろ相伴はざるを喜ぶ。抱負は常に實行に先んぜざるべからず。實行二倍大となれば、抱負は三倍大とならざるべからず。この點に於ては、むしろ言行の一致せざるが望ましき也。抱負小にして小成に安んじ易きもの、安んぞよく大なる活動を爲すを得んや。

## 智 慧

智慧は、一は生れ付也。二は幼時の教育也。三は學問也。四は經驗也。五は沈着にして注意深く、疑深く、思慮深きなど性格にもとづくこと也。この外、膽すわり居れば、智慧生じ、恐れ過ぐれば、折角の智慧



も智慧を失ふことあり。酒のみて、智慧の多くなる人あり。また全く分別を失ふ人もあり。考へ過ぎて反て拙計を出す人もあり。之を要するに、生れ付と幼時の教育習慣とが土臺にて、學問之を正しくし、經驗之を大にし、熟慮して頭を練り、常に恐れず、また侮らずんば、智慧は自ら出づべし。

準備大なるものは成功大也

準備大なるものは、成功大也。多く息を吐かむとせば、多く吸ひ込まざるべからざるが如く、大に爲さむとするものは、大に學ばざるべからず。而して學の用をなすは、専門の學問にあれども、専門學を修めむには、普通學の修養十分ならざるべからず。

膽力

人につかはるゝ者は、才能のみにてても可なるべし。されど、自から主となりて事業をなし、人の上に立たむとするものは、別に膽力なからざるべからず。

膽力とは、意志の鞏固なるの謂也。平たく言へば、物事に恐れざるの謂也。

向ふ見ず

神經過敏なる人は、概して膽力に乏し。之に反して神経にぶく、知明かならざる者は、膽力の外形を現す。譬へば、盲人蛇を恐れざるが如し。すべて知れば恐多く、知らざれば恐少し。所謂向ふ見ずは一種の膽力にして、野蠻人が開化人よりも、概して死地にのぞみて膽力あるは、所謂向ふ見ずに基づく。向ふ見ずは、つまり知の明かならざるに由る也。

宗教上の悟地

禪其他の宗教などにて悟地を得て、よく安心立命せるものは、妄りに死を恐れず、物事を恐れず、生死の境に出入して、綽々として餘裕



あるもの也。日蓮の如き、生れつき豪膽なるによれど、宗教上の悟地あるによりて、幾度も平氣にて白刃の下にたちし也。

膽力を鈍らすもの

すべて、神経質的、感情的にして、め、しく、耻を解せず、勝氣に乏しく、小才ありすぎて、一身上の利害にあまり敏きなど、いづれもみな膽力をにぶらすもの也。

知情意

人をして活動せしむるものは情也。情の中の慾望也。苦を避けて快に就かむとす。而かも知明かならざれば、一時の快に就きて後日の大苦を來たすことあり。私のみを營みて世を害することあり。知のみがかざるべからざる所以也。而かも知は冷かなるもの也。人の行爲に就いて忠告を與ふれども、之を強制するの力乏し。倫理學者が必ずしも徳行家にあらざる所以也。よく之を強制するものは、則ち意志也。

詩歌小説に耽るべからず

余は年少の士に告ぐ。詩歌小説を讀みて情感を養ふは可也。されど之に耽るべからず。詩歌小説は情に訴ふるものなれば、之れに耽らば情は高まるべけれど、毫も意志の鍛鍊を補ふものなし。薄志弱行とまてはならずとも、氣隨我儘にして放言を喜び、着實をいやしみ、物のあはれは知れども、規律を嫌ひ、堅忍不拔の氣象終に缺乏するに至るべし。古來詩人文人美術家などは、皆意志の鍛鍊なきもの也。情のみ高まり且つ熱す。これ詩や文や美術品をつくるには適すれども、世に立ちて事をなさむには、最も不可也。

駄小説を排斥す

余輩は文學を愛す。然れども人心を軟化し、風俗を紊る駄小説を排斥す。

唯天を畏るべし



人はたゞ天を畏るべし。權威を恐るべからず、争闘を恐るべからず、敵を恐るべからず、攻撃を恐るべからず、白刃を恐るべからず、死を恐るべからず。

影口の弊

日本人のよく口にする『噂をすれば影がさす』とは影にて人の悪口たけけるに、忽ち其の人の來るに逢ひて吃驚して放てる言にして、一種の諺として、今に人口に膾炙するを見れば、影にて悪口たゞく惡癖、今に絶えざるを知るべし。

親展の二字

手紙の封筒に、親展の二字あるは、他人の妄りに開く習慣あるを證するもの也。即ち日本人士は、他人の信書を密開するまでに公德心なき也。

書物を借りて返さぬ惡癖

金を借りて返さなければ、不徳と心得るも、書籍をかりて返さざるをさまで不徳と思はざるが如し。されど金は得易し。書物の或る物に至りては、二つは得ざるものあり。かゝる大切なる書物をかりて、かへさざる時は、持主の迷惑いばかりぞや。この惡癖は、早く改めたきもの也。

放屁と欠伸

日本人は人の前に放屁することは之を耻づれども、人の前に欠伸して憚らざるもの多し。紳士たるたしなみなきものと云ふべし。

日本人の乞食根性

『おどろ』といふ語、常に口にせらるゝを見ても、日本人士の乞食根性に富めることを知るべし。人をほむれば則ち曰く、『おどれ』と。褒めらるれば則ち曰く、『おどらないよ』と。おどるとは、御馳走するの謂也。日本人士はいちぎたなしといふべし。己れ錢なくんば、何んぞ



芋をかじつて自から甘んぜざる。他と酒食を共にすれば、何ぞ其の費用を分擔せざる。さもしき哉、日本の紳士、成るべく自腹を切らずして、旨きものを食ひ、面白き目に逢はむと欲す。かくて他におごらせる也。會費を要する宴會には、差支あるもの多くして、御馳走の宴會には、據なき事故あるもの少なき也。

青年を毒するの甚しきもの

青年の士を毒するの甚しきものは、酒にあらず、煙草にあらず。それたゞ所謂戀愛文學乎。

油揚を以つて狐を釣り、利を以つて小人を釣り、名を以つて志士を釣り、戀愛を以つて青年を釣る。その誘惑の術は至れりと雖も、さりとは罪の深きわざ哉。

孰れか情なからむ

春水波平かにして、鴛鴦相伴ひ、秋山葉落ちて、麋鹿相呼ぶ。生き

とし生けるもの、孰れか情なからむや。然るに、賢を賢として色に代ふるもの、これ情の冷かなるに非ず。人生の務を解して、大に爲すあらむとするの情熾なれば也。

青春の迷夢

恐るべき哉。戀愛は盲目也。唯其れ盲目也。故に蛇を恐れず、耻を恐れず、死を恐れず、世間の義理もそつちのけ、人の噂も何ならず、智者も愚となり、學者も無學となり、氣骨あるものも海月の如くなり、正直なるものも食言者となり、詐偽者となり、親を欺き、友を賣り、かくて色男となりすまして、一時戀愛の外に天地人生あるを知らざれど、もとこれ青春の迷夢也。いかてか覺めざらむや。

今是非

愛の權化の天女と思ひしも、悟りて見れば、臭骸也。否、骸骨也。桃を分ちしを深き情と喜びしも愚や。寢息くさき口の食ひあましかと



思へば、人を馬鹿にせるも亦甚しからずや。嗚呼過てり、迷へり。今は是にして、昨の非なるを知る。而して心を入れかへて學ばむとすれば、年既に老いたり。事業を起さむとすれば、妻子手足をまとへり。止んぬる哉。

紳士たるの態度

しやべらむと欲せば、先づ紳士らしき話柄を得よ。悪口言はむと欲せば男らしく其人の面前にて言へ。紳士たるもの、決してかけにて悪口言ふべからず。おしやべりのあまり、無暗に他をけなし、他の私行をあばきて得々たるは、頗る傍いたき事也。自家の自惚、我子、我親の自慢を言ふに至りては、鼻持ちのなつた次第にあらず。更に下りては食物のうはさ、どこの團子はうまかりき、どこの料理はまづかりきなど、得々として談り出すは、竟にこれ餓鬼道の亡者也。文明の紳士學生と云ふべきものに非ず。

辯舌に動かさずして熱心に動く

辯舌の妙とは必ずしもすらく調子よくしやべるの謂に非ず。輕辯縦横なる島田三郎氏よりも、期々艾々たる三宅雄次郎氏の方が、却て人を動かすことなしとせず。然らば辯舌の法は如何にぞや。

世人もし口がよく立つを以つて辯舌の妙を得たるものなりと思ふあらば、これ大なる誤解也。口のあまりよく立つは、輕佻に流れて、いやみあるもの也。幫間、落語家の辯、よく人を笑はしむるも、何となく賤しく下品にして人を動かさず。口の先より出でずして、言々肺腑より出で、貫目ありて輕浮ならずんば、たとひ流暢ならずとも、よく人を動かすもの也。否、場合によりては、流暢ならぬ方が却てよき也。人は辯舌に動かさずして、辯者の熱心に動く。辯舌を練らむとするものは、先づ此點を考へざるべからず。

青年は冒險的旅行を爲すべし



青年時代には、艱苦缺乏に堪ふるの習慣を養成せざるべからず。而して、草行露宿的旅行は、その一方法なるべし。人力車の通ずる名所古跡は、老人でも行ける也。婦女子でも行ける也。普通の名所古跡は年老いて、腰た、なくなりて後、行きて可也。活氣ある青年は、須らく冒險的の旅行をなすべし。

海國男兒の修練

日本は海國也。海國の男兒たるものが、船にのれば直に酔ふやうにては困る也。先づ大抵の風波に逢ひても酔はざるやうになり、怒濤を見ること恰も席の如くなるだけの膽氣は有りたきもの也。それには平生の修練を要す。成るべく常に舟遊をなすべし。ボートも可也、和船も可也、蒸氣船も亦可也。舟にのるにつけては、水練の心掛なかるべからず。海國の男兒が、隅田川の如き處にて、舟覆りて、忽ち土左衛門となりては、豈に情けなき次第に非ずや。

義理

己れ如何に好まざるも、約束せし事は、履行せざるべからず。これ義理也。命は惜しきも、國家の爲めには死せざるべからず。これ義理也。我子は見殺しにしても、主君の子は助けざるべからず。これ義理也。金は欲しきも、不義の財は取るべからず。これ義理也。義理の觀念牢くして、はじめて道德よく行はれ、社會よく圓滿に發達する也。

酒の友

酒の友は、酒上にて親しくなりたる友也。或はよく談じ、或はよく飲み、或はよくふざけ、或はよく笑ひて、共に酒をのむには、座興を添ふる事多し。たゞ酒の相手として交際すれば可也。之をたよりにすべからず。之に感化せらるゝは愚の極也。

學問の友

學問の友は、同じ學校に學びたる人か、もしくは同じ學問をなす人



也。益をうくること多し。相問ひ、相共に切磋して、己れの足らぬ所を補ふべし。これより以上の事は望まずして可也。動もすれば互に相競争し、敵視し、懇望するものあり。小人の事也。

職業の友

職業の友は、同じ職に従事する人也。日々同じ所に出勤し、相集る。中には氣にくはぬ人もあるべし。されど、職業が主なれば、人物氣質を一々吟味すべきに非ず。成るべく衝突をさけ、互に事務の擧らむことを期すべし。

同郷の友

同郷の友は郷里を同じうせるもの也。郷里にありし時は、知らざりし人にもせよ、異郷にて相逢へば、何となくなつかしきもの也。此情兩人を結びつけて、こゝに友となる。されど、單に此點のみにては、友情なほうすかるべし。一郷には一郷の特質あり。その特質を同じく

有する人同士にして、交情はじめてあつかるべし。

社交の友

社交の友とは、職業に關せず、社會に立ちたらく上に於て、自から出來たる友也。會食も共にすることあるべく、共に公共の事に従ふこともあるべし。遊戯の友とは、碁の友、遊獵の友など、樂を同じうする友也。竹馬の友とは幼時より親しき友にして、第二の兄弟とも云ふべく、とりわけてなつかしく思はるゝ者也。

心交の友

人は同氣相求む。氣質性行もしくは抱負の我と同じきものある人は友として交ことに親しかるべし。これ友也。心の友とて、別に存在するに非ず。酒友、學友、職友、郷友、社交、竹馬、遊戯の友の中に之あるべし。意氣相投じ、肝膽相照し、彼よく我を知り、我よく彼を知り、緩急相助け、難苦を共にして厭はず、浮世は爲めに寂寞ならず。



げに心交の友は、兄弟にもまさりて親しきものあり。管飽貧時の交りは、交友の極致也。

### 修養贅澤の味を覺えぬがよし

すべて世の中の物事は、知らねば知らぬてすむもの也。酒をのまぬものが、飲むものよりも快樂少しといふべきことなれば、芝居を見たるものが、見ざる者より幸福なりといふべき筈もなし。人は成るべく、修養贅澤の味を覺えぬこそよけれ。一旦贅澤の味を覺えたるものが、贅澤する能はざるときは、非常に苦痛を感ずべし。

### 安心立命を得る簡便法

われ安心立命を得る簡便法として、之を藝能に得むことを勸むる也。最も好む所に従ひて、藝能を擇び、熱心に之を練習し、練習するに従ひて、手腕益進み、興味益加はらば月日が面白く送らるべし。慰藉を得べし。苦も之によりて忘らるべし。之によりて、名聲を博せば、な

は更氣持よかるべし。之によりて、衣食に餘裕あるやうにならば、一層都合よかるべし。かくて、自から安心立命を得べし。その安心立命は、即ちその人の技能也、職業也。身を立つることを得れば、世をも益する也。一舉兩得も當ならず。古人曰く、技、道に進むと。即ち是也。

### 東洋的豪傑

古來東洋人が一般に景慕する人物の模型あり。豪放磊落、細節にかかはらず。沈黙にして果斷に、口舌の巧を弄せず。よく食ひ、よく飲み、無邪氣にして邊幅をかざらず。義を重んじ、利を輕んじ、志天下にありて、一身一家を顧みず。然諾を重んじて、死を視ること歸るが如く、生産を治むるを屑しとせず、膽氣を以て天下に濶歩す。これ所謂東洋的豪傑也。

### 一般國民に望む



東洋的豪傑の氣風の俤は、何人も多少之を有したきものなれども、一般の國民は常識の明かなるを要す。智能をみがくを要す。生産を治むるを要す。忠實なるを要す。餘り豪放にすぐべからず。よくしまりあるを要す。細心にして思慮周密なるを要す。先づ家を治めて後、世につくさるべからず。餘り豪傑を氣取り、豪傑ぶるは、むしろ社會に害あるも益なき也。

#### 人間の一大美德

職業に忠實なるは、職業の完全を致す所以にして、又人間の一大美德也。苦痛もこれによりて忘れ、慰藉もこれによりて得られ、我身は我職業と融和し、我職業の外に我天地なく、我職業の爲めに斃れてやむの精神あらば、其人の一生は如何に美しかるべきぞや。

#### 我黨の士に非ず

功名富貴の一途に醉生夢死するは、未だ修養を積まざる俗人也。少

しく修養を積んで意志を練らば、よく現實以上に超脱するを得べし。富貴を以て幸福とせず、況んや不義の富貴をや。榮譽を以て快樂とせず、況んや、虚名をや、凡俗雷同の稱賛をや。國家の爲め、人道の爲め、主義の爲めには、一身輕さと鴻毛の如し。一生理想の爲めに苦しむ。その苦しむは即ち楽しむ所以也。而してもし之をしも強辯なりと思ふものあらば、そはなほ凡俗の域を脱せざるもの也。我黨の士に非ず。

#### 達人の域

世俗は社會の何たるかを解せず、肉體的に、精神的に、たゞ一身の満足を求め、品性人格を度外に付して、物慾、名利、物質的快樂に殉ずるが常なるに、才器あり、學識ありて、而も名利の巷に迷はず、高蹈して一身を善くするは、一寸凡俗の眞似の出來ざる所也。而も之を眞の達人と云ふべからざるは、社會を忘れたれば也。古人も言ひけむ天下の憂に先つて憂へ、天下の樂に後れて樂む。これ達人の域也。



天真流露して作らず飾らず、ぶらず術はず、殊更に奇を求めず、強ひて新を逐はず、平易坦々として行くところに行き、止まるところに止まるものは、我が桂月先生の文章也。冲澹無欲にして邊幅を修めず、物に拘はらず、常に山水に放浪し、詩酒に悠游して塵外に超然たるは、我が桂月先生の人格也。先生の所謂『文章は人格也』とは、先生に於て真にその然るを見る。先生の如きは、文と人と、共に聖なるものと謂ふべし。

先生は他行するに、よそゆきの衣服を著けず。寫真をうつすに、よそゆきの顔色を爲さず。文を屬するに、よそゆきの文を作らず。演壇に立つて、よそゆきの聲を發せず。吾れ先生に於て、始めて自然の人を見る。先生は生れながらの高士と謂ふべし。

然れども、先生は固より枯木寒巖の徒にあらず、太平の逸民にあらず。胸中自から血あり涙ある熱性男兒にして、時を憂ひ世を慨し、忠君愛國の志深く、又温情にして人の窮苦を憐み、不幸に同情し、己れを責むるに嚴にして、他を責むるに寛也。殊に青年の活氣を愛し、青年の師友を以て任じ、青年雜誌に筆を操ること二十有餘年、鬢髮すでに半白の霜をおぶるに至るも、諄々として教へて已まざる也。吾れ先生に於て、始めて眞の青年指導者を見、つれに先生に對すること、初夏新緑の氣分を感じずんばあらず。

『大正青年訓』は専ら現代青年を指導し教訓せむがために編述せられたるものにして、先生二十餘年新舊作中の精を抜き髓を萃めたるもの、片言隻句も亦金玉の聲あり。大正の論語を以て稱するも、強ち溢美にあらず也。青年諸君、常に座右に此一巻を備へて、朝夕熟讀玩味し、以て躬行實踐を怠るなくんば、庶幾くは大過なからむ乎。僕些か本書の纂輯校正に參するあり。乃ち秃筆を呵して、一言所感を卷尾に附すること爾り。

大正六年初夏新緑の下に

後學 松本道別謹識

大正六年五月廿七日印刷  
大正六年六月一日發行

定價五十錢

著作權所有

(※)

大正青年訓

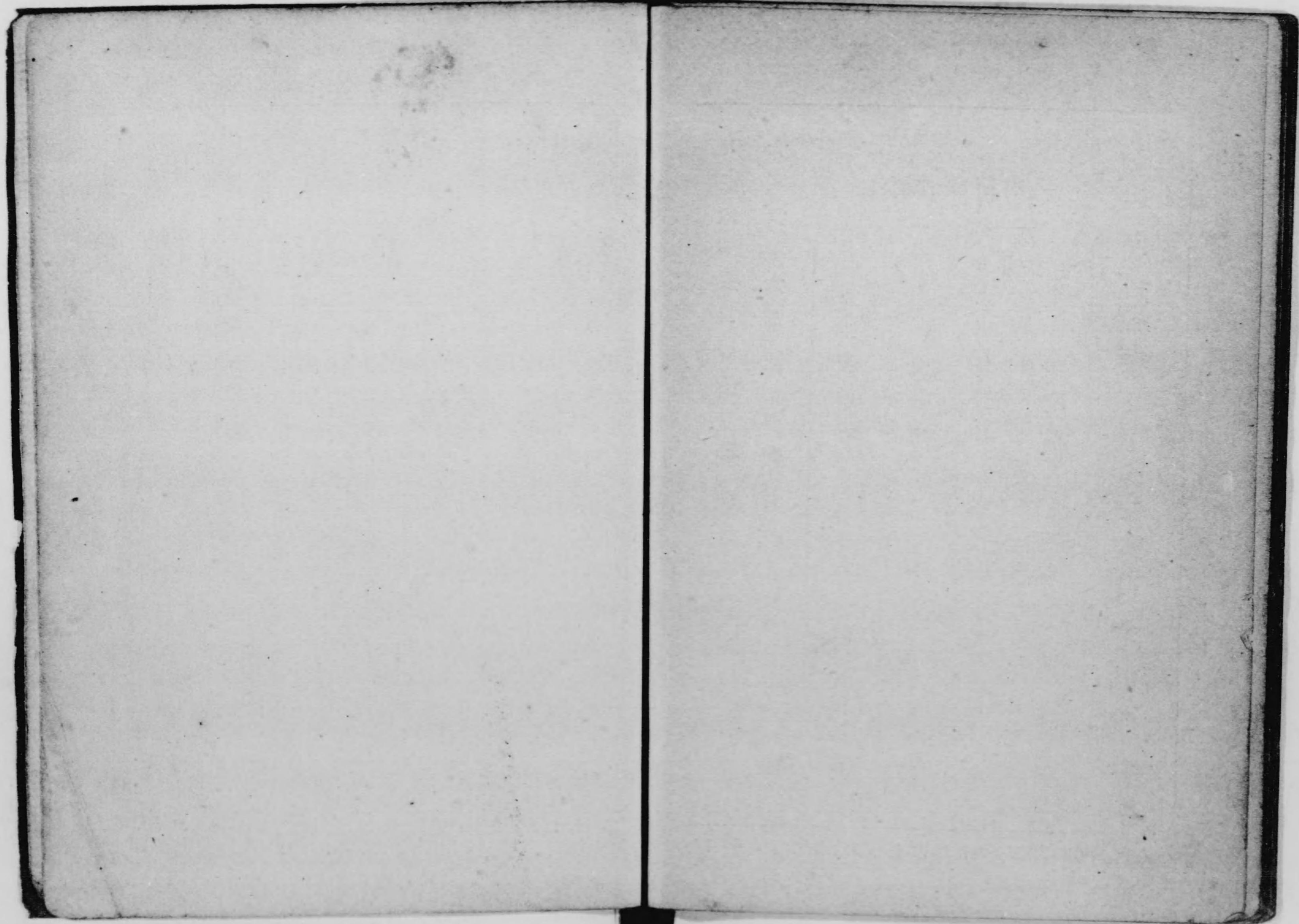
著作者	大町桂月
發行者	東京市京橋區南傳馬町一丁目一番地 戸田節次郎
發行者	東京市芝區白金三光町二百七十三番地 成井貞雄
印刷者	東京市京橋區弓町二十五番地 高橋郁

發行所

東京市芝區白金三光町二七三  
(振替東京三〇五三四番)

大日本勸學會







364
170







364  
170



終